

# 向 畑 遺 跡

向畑遺跡発掘調査報告書

1982

高山市教育委員会

## 序

高山市内には、現在知られている遺跡が約 220 箇所ある。これらの遺跡には、私たちの祖先が築いてきた歴史が、土器や石器などの遺物、竪穴住居址などの遺構として地下に埋蔵され、発掘調査によって、徐々にではあるがその歴史が明らかになりつつある。

向畑遺跡は、縄文、弥生時代の遺跡として、岐阜県遺跡台帳に記載されているが、この地区を含む江名子町向畑地区の飼料畑、圃場整備事業が計画された。そのため遺跡の滅失が懸念される状況となり、工事に先立ち緊急発掘調査を実施することになった。

調査にあたっては、主任調査員として日本考古学協会員の大江命氏を委嘱し、多数のかたがたのご協力を得て発掘調査を完了することができた。また、縄文早期から弥生時代の遺構が確認されたこと、貴重な遺物が多数出土したことなどは、飛騨地方の考古学研究発展に多いに役立つことと思われる。

報告書刊行にあたり、土地所有者のかたがたをはじめ、調査に従事、ご協力をいただいた皆様に感謝申し上げるとともに、本書が文化財保護に大きな役割を果たすものと確信するものである。

昭和58年3月

高山市長 平 田 吉 郎

# 本文目次

序

例言

第 1 章 遺跡の環境	1
第 1 節 向畑遺跡の位置と環境	1
第 2 節 向畑遺跡の地形と地質	4
第 2 章 発掘の経過	7
第 3 章 遺構と遺物	
第 1 節 縄文早期の住居址 (SB04)	10
第 2 節 縄文前期の住居址 (SB02, 05, 07, 11, 13)	11
第 3 節 縄文中期の住居址 (SB01, 03, 06, 08, 10, 12)	18
第 4 節 弥生時代の住居址 (SB09)	28
第 5 節 土 壙 (SK1~5)	29
第 6 節 ビット群 (第1~3ビット群)	32
第 7 節 その他のビット (大Pi, 第1号集石遺構)	35
第 8 節 北東地点	36
第 9 節 近世墓 (第1, 2近世墓)	40
第 4 章 主要な土器と石器遺構別分類表	43
第 5 章 総 括	49

# 挿 図 目 次

挿図 1	向畑遺跡の位置と周辺の遺跡 .....	1
2	昭和43年と昭和52年の地形図 .....	4
3	向畑地区の地形図 .....	6
4	地形断面図と地質略図 .....	6
5	北東地点の断面図 .....	6
6	調査区域グリッド区画図 .....	8
7	遺構全体平面図 .....	9
8	第4号住居址 (SB04) 実測図 .....	10
9	第2号住居址 (SB02) 実測図 .....	12
10	第5号住居址内の集石遺構実測図 .....	13
11	第5号住居址 (SB05) 実測図 .....	14
12	第7号住居址 (SB07) 実測図 .....	15
13	第9, 10, 11, 12号住居址 (SB09, 10, 11, 12) 大P <sub>1</sub> 実測図 ..	16
14	第13号住居址 (SB13) 実測図 .....	17
15	第1号住居址 (SB01) 実測図 .....	19
16	第3, 4号住居址 (SB03-04) 第1号土壌(SK 1) 第2ピット群実測図 .....	21
17	第3号住居址 (SB03) 土層断面図 .....	22
18	第6号住居址 (SB06) 実測図 .....	23
19	第8号住居址 (SB08) 実測図 .....	24
20	第10号住居址 (SB10) 実測図 .....	26
21	第12号住居址 (SB13) 実測図 .....	27
22	第9号住居址 (SB09) 実測図 .....	28
23	第1号土壌 (SK1) 実測図 .....	30
24	第2号土壌 (SK2) 実測図 .....	30
25	第3号土壌 (SK3) 実測図 .....	31
26	第4号土壌 (SK4) 実測図 .....	31
27	第5号土壌 (SK5) 実測図 .....	31
28	第1ピット群実測図 .....	33
29	第3ピット群実測図 .....	34
30	大ピット (大P <sub>1</sub> ) 実測図 .....	35
31	第1号集石遺構実測図 .....	35
32	北東地点土層断面図 .....	37
33	第2号集石遺構 .....	37
34	第1号近世墓実測図 .....	40
35	第2号近世墓実測図 .....	41
36	土器実測図 (1) .....	44

挿図 37	土器実測図 (2)	45
38	土器実測図 (3)	46
39	弥生式土器実測図	47
表1.	第3ピット群, 各ピットの規模, 内容	35
表2.	出土石器遺構別分類表	48

## 図 版 目 次

- 図版1 遺跡全景，表土除去完了
- 2 作業状況，SB01
- 3 SB02～SB04
- 4 SB05～SB07
- 5 SB08
- 6 SB09～SB11
- 7 SB12～SB13，SK1～SK2
- 8 SK3～SK5，第1～3ピット群
- 9 大P1，北東地点
- 10 北東地点，第1号近世墓
- 11 第2号近世墓，市民見学会
- 12 SB01出土遺物
- 13 SB02出土遺物
- 14 SB03出土遺物
- 15 SB04出土遺物
- 16 SB05出土遺物
- 17 SB06出土遺物
- 18 SB07出土遺物
- 19 SB08出土遺物
- 20 SB09出土遺物
- 21 SB10，SB11出土遺物
- 22 SB12出土遺物
- 23 SB13出土遺物
- 24 SK1～5出土遺物
- 25 第1～3ピット群出土遺物
- 26 大P1，北東地点出土遺物
- 27 北東地点出土遺物
- 28 北東地点出土遺物

## 例 言

1. 本書は、昭和57年7月21日から9月20日まで発掘調査を実施した、岐阜県高山市江名子町向畑地内の向畑遺跡発掘調査報告書である。
2. 向畑地区の飼料畑、圃場整備事業により、本遺跡が破壊されるため発掘調査を実施したものである。本遺跡発掘調査は、岐阜県補助金（岐阜県文化財保護費補助金・昭和57年7月10日付教文第310号）の交付を受けて実施した。
3. 調査は下記の調査団によって実施した。

団 長	高山市長 平田吉郎	調 査 員	奈良大学学生 川上富子
副 団 長	高山市教育長 長瀬正三		関西大学学生 徳田誠志
主任調査員	日本考古学協会員 大江 命	事 務 局	高山市教育委員会
調 査 員	" 石原哲弥	事 務 局 長	中屋政二
	岐阜県考古学会員 寺地茂雄	社 会 教 育 課 長	増井淑郎
	" 藤本健三	文 化 財 係 長	小林 浩
	" 野村宗作	文 化 財 主 任	田中 彰
	" 吉朝則富		
	高山考古学研究会 会 員		

4. 本編の執筆は、大江命、石原哲弥、吉朝則富、藤本健三、野村宗作が行った。
5. 本編の挿図作成、図版の写真撮影は岩花秀明、竹内弘次、田中彰が行った。
6. 調査にあたり、岐阜県教育委員会文化課波多野寿勝氏のご指導を得た。
7. 調査にあたって、助言、協力を賜った下記のかたがたに深く感謝の意を表する。  
京都国立博物館考古室長 八賀晋氏、平安博物館 片岡肇氏
8. 発掘調査にご理解とご協力をいただいた地元土地所有者のかたがた、土地改良組合の皆様  
に深く感謝の意を表する。（調査協力者）江名子長寿会、山下久男氏、間由松氏
9. 遺跡の略号は竪穴住居址をSB、土壌をSKとした。挿図中、焼土は地紋で表した。
10. 方位は磁北とした。
11. K16-19, L16-22, M16-18 グリッドの地区を北東地点と呼称する。

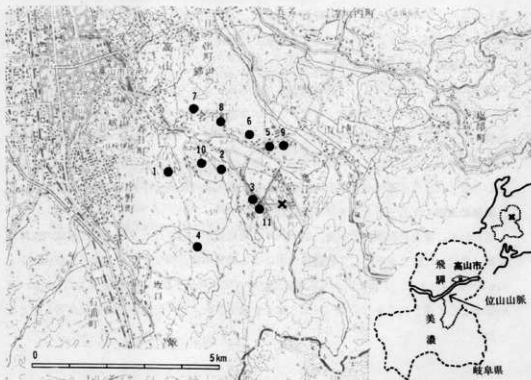
# 第1章 遺跡の環境

## 第1節 向畑遺跡の位置と環境

向畑遺跡は岐阜県高山市江名子町大字上江名子字向畑に所在する。高山市街より南東方向へ約3km、表日本と裏日本を分ける位山山脈の北側山麓に位置している。江名子町一帯の台地には後述する多くの先史時代の遺跡が分布している。上江名子町の集落の西側に江名子川が流れており、向畑橋や正尺橋を渡って向畑の台地に登る。地名の意味がうなずけられる。

向畑台地は、昭和40年代に北側の舌状台地を削り、養豚場が造成され遺跡の一部が滅失した。台地の西側の崖下には豊富な清水が湧出している。向畑から江名子川を約1km遡ると、特殊神事(一夜作りの甘酒祭)で有名な「荒神様」と呼ばれる社がある。さらに谷川に沿って急坂を辿ると、高度約1,000mの分水嶺を越して大野郡久々野町小屋名に至る。この峠の西方に大西峠、東方には美女峠がある。

挿図1 向畑遺跡の位置と周辺の遺跡 (×向畑遺跡)





向畑遺跡に関する最初の文献は、江馬修による昭和9年の調査である。精円押型土器1片と諸磯式類似土器の出土が報告されている。昭和10年発行の「飛騨石器時代地名表」には、向畑遺跡の遺物として縄文式土器、弥生式土器、石鏃、石錐、有孔磨製石鏃、打製石斧、石匙、石錘、凹石、珠状耳飾、勾玉が記載されている。

昭和11年に杉原莊介が来高し、江馬修が向畑で採集した弥生式土器1片をとりあげ、東海地方の貝田町式系の細口有頸壺と指摘している。昭和14年に江馬修は向畑遺跡を縄文前期の単純遺跡と推定している。以後、長い間本遺跡は研究対象とされることがなかった。

昭和47年に刊行された「岐阜県史 通史編原始」で、安達厚三は先土器時代（縄文草創期）の遺物として向畑遺跡出土の有舌尖頭器3点を紹介した（江名子町谷口二一所蔵）。昭和48年より吉朝則富は当地区の調査を進め、縄文早期に特有な楕形鏃、縄文前期、弥生時代の土器片や磨製石斧、石匙、玉などの遺物約300点を表面から採取した。畑の耕作中採集された遺物も多く、最近では中学生の小屋垣内進、中谷勝弘が石鏃、石匙、石錘、打製石斧、磨製石斧、石皿など約100点を表採している。

次に挿図1の江名子町に分布する遺跡について略述してみたい。（遺跡番号は挿図1の番号と同じ）

### 1. ツルネ遺跡 江名子町大字正史字ツルネ

昭和51年に緊急発掘調査を実施し、53年に報告書が刊行された。縄文時代中期の住居址3基と古墳時代の住居址1基、縄文時代中期のビット群3箇所と植物の炭化種子、弥生時代後期の方形周溝墓（県下で最初の発見）1基などの遺構と多数の土器、石器が出土した。

### 2. ひじ山遺跡 江名子町大字諏訪が洞字ひじ山

昭和10年代に江馬修によって発掘調査された著名な遺跡である。山内清男、杉原莊介、森本六爾、吉田富夫の論考などが「ひだびと」によって発表された。縄文早期の押型土器と石器、縄文前期、弥生時代の編年研究を知ることができる。現在は耕作等で遺構検出は期待できない状況である。江名子町成田幸一（千稲）が、本遺跡と後述の薬師野遺跡を中心に採集した数千点に及ぶ遺物を高山市に寄贈し、歴史民俗資料館高山市郷土館に保管されている。

### 3. 薬師野遺跡 江名子町大字矢林字薬師野

昭和54年に緊急発掘調査を実施。昭和56年に報告書が刊行された。弥生時代後期の住居址1基（炭化した柱を資料にして放射線炭素による絶対年代が測定された。2260±110B・P・GaK-9054）また、7世紀末から8世紀にかけての住居址1基と遺物が出土した。なお、言い伝えとして遺されてきた「なべかぶり塚」が発掘され、江戸時代中期の墓址が明らかとなった。

#### 4. 糠塚遺跡 江名子町と片野町にまたがる遺跡

明治23年に田中正太郎によって、飛騨で最初に縄文土器が発見された遺跡として有名である。昭和10年頃、江馬修の発掘調査により「糠塚式土器」として編年命名された。昭和57年度に緊急発掘調査を実施し、報告書が刊行された。<sup>(註8)</sup>住居址は縄文時代前期2基、古墳時代15基などの遺構と、縄文早期から7～8世紀に至るまでの多数の遺物が出土した。特に縄文前期の住居址から出土した列孔浅鉢土器の完形品2個は、特筆されるものである。

#### 5. 泉水遺跡 江名子町大字上江名子字泉水

この付近を畑敷屋敷ともいう。昭和初期に犬塚行蔵による中世史の研究がある。昭和7年に笠原鳥丸は小規模の発掘を試み、「飛騨国初発見の弥生式土器に就いて」と考古学雑誌22の7に発表した。現在の知見では古式土師器と推定されている。<sup>(註9)</sup>この付近一帯に（字上野も含めて）遺物の散布が見られる。有舌尖頭器1個が前述の果史に記載されている。益田郡下呂町森の神社には御神体として、この地より出土した石棒が奉納されている。

#### 6. 保木遺跡 江名子町大字上江名子字保木

広い台地で遺跡であったが、殆んど滅失した。遺物の一部は、江名子町谷口文夫が保管している。縄文中期、後期の遺物が主で、御物石器も出土している。

その外に、7 錦山遺跡、8 鷹ノ巣遺跡、9 上野遺跡、10 家廻り遺跡、11 矢林開墾地遺跡などがあるが、いずれも小規模の散布地である。11の遺跡から出土した遺物は、江名子町中田栄造が保管している

(註1) 江馬修「飛騨に於ける古式縄文土器」石冠2の3 昭和9年

江馬修「再び環状石垣その他について」石冠2の4 昭和9年

(註2) 飛騨考古学協会によって発刊。序文は八幡一郎、遺跡数は327箇所

(註3) 杉原莊介「高山市付近の弥生式土器」ひだびと5の4 昭和10年

(註4) 赤木清「飛騨石器時代に於ける糠塚文化の研究(1)」ひだびと7の4 昭和14年

(註5) 高山市教育委員会「ツルネ遺跡発掘調査報告書」昭和53年

(註6) 江馬修「江名子ひじ山の石器時代遺跡(1)～(10)」ひだびと4の4～5の3 昭和9～10年

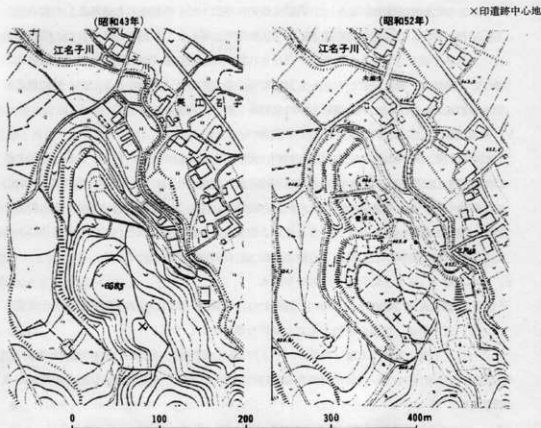
(註7) 高山市教育委員会「薬師野遺跡発掘調査報告書」昭和56年

(註8) 高山市教育委員会「糠塚遺跡発掘調査報告書」昭和57年

(註9) 大塚みつ「大塚行蔵飛騨考古学遺稿」昭和14年

大塚みつ「新訂大塚行蔵飛騨考古学遺稿」昭和56年

挿図2 昭和43年と昭和52年の地形図



## 第2節 向畑遺跡の地形と地質

海拔約1000mの尾根を連ねる分水嶺の北側山麓には、石浦町飯山より塩屋町にかけて江名子断層（活断層）<sup>(註1)</sup>が走っている。この地域には鮮新世から洪積世にかけての地層が発達している。今回の土地造成工事で向畑台地につながる丘陵が削られ、活断層を示す露頭があらわれて注目されている。

この地域の地形を大きく区分すると次のようになる。

**高 位 面**（天井面） 海拔約700～670mの定高性をもつ丘陵頂部の平坦面で、北方に高度を下げる。基盤の荒城川火砕流（両輝石安山岩質の熔結凝灰岩、鮮新世末の噴出）が浸食された残丘で、三層の火山灰層（上から町方、高山、広敷ローム）と表土の黒ボクが見られる。高度約10mの下位に同じ層序の面がある。いずれも現在まで遺跡は発見されていない。

**中位面 I (ツルネ面)** 海拔670~640mの台地状地形面で、荒城川火砕流が浸食された谷に堆積した矢林礫層(チャートの亜角礫、粘土層、亜炭層をはさむ)桜ヶ丘礫層が堆積し、それを三層の火山灰層と黒ボクが覆う。多くの遺跡はこの面に分布している。

**中位面 II (薬師野面)** 海拔660m~630m。崖堆性の堆積物、または桜ヶ丘礫層の上部に一層の火山灰層(高山軽石層は見られない)と黒ボクが覆う扇状地形や台地で、高山軽石層の有無により、中位面をI、IIに分ける。

**低位面(水田地帯の面)** 高山盆地の沖積面より約30mの高位の面である。北方に低くなる扇状地形である。

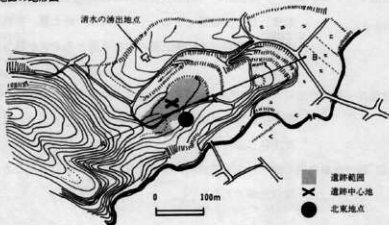
向畑遺跡は中位面Iで低位面より約25m高位の台地面に位置している。(挿図3・4)土層は、黒色の耕作土(約20cm)褐色土(約15cm)、その下部が黄褐色のローム層(約2m)で、高山軽石層(約50cm)をはさんでいる。今回の調査で特筆されるのは、台地東側の傾斜地(北東地点と呼称する)で、沖積層の火山灰層(アカホヤ火山灰)<sup>(注2)</sup>が発見されたことである。(挿図5) 検鏡により、アカホヤ火山灰の特徴を有する薄板状の火山ガラスが極めて多く、バミスや赤色のスコリア粒(5mm~3mm)強磁性鉱物(0.1mm程度)斜方輝石(直径0.5mm~0.2mm)単斜輝石、熔融状の石英粒が認められる。厚さ10cm程度の粘質赤褐色層である。アカホヤ火山灰は鹿児島県南の鬼界カルデラから噴出した広域火山灰であり、絶対年代の中央値が約6,500年前と測定されている。この層の下部から縄文早期終末期の粗大押型土器が出土した。上部の褐色粘質土層にも早期末土器片が出土しているが、検鏡では洪積世の町方ロームを構成する鉱物(針状角閃石、斜方輝石、火山ガラス等)が認められ、流れ込みの土器と考えられる。

アカホヤ火山灰層は北東地点のみで検出され、その堆積には特殊な条件があったものと考えられる。当地方では最初の発見であり、黒ボク内に吸収された部分についても、今後、検鏡による分析が必要と思われる。(石原)

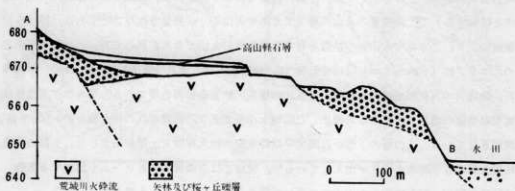
(注1) 鹿野勤次「江名子断層」 岐阜県地学教育15号 昭和54年

(注2) 町田洋、新井房夫「南九州カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰—第四紀研究」 昭和52年

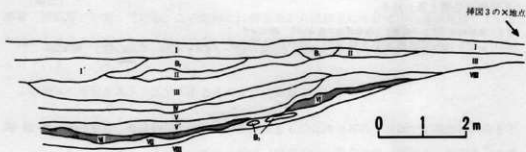
挿図3 向畑地区の地形図



挿図4 地形断面図と地質略図



挿図5 北東地点の断面図 (挿図3の●地点)



- I 耕作土層
- I' 褐色土層
- II 黒色土層(僅かに褐色)
- III 褐色土層(灰少量)
- IV 黒色土層

- V 褐色粘質土層
- V' 褐色粘質土層(僅かに黒色)
- VI 赤土層
- VII ローム粒混入粘質土層
- VIII 黄褐色ローム層

- B<sub>1</sub> ローム粒混入褐色土
- B<sub>2</sub> レキ混入黒色土
- B<sub>3</sub> 黒褐色粘質土

## 第2章 発掘の経過

昭和56年、埋蔵文化財包蔵地を含む江名子町向畑地区の畑、草地造成事業が計画された。遺跡の破壊を懸念した市教育委員会は、関係機関と協議を重ね、昭和56年8月20日岐阜県文化課、市畜産課関係者、地元土地改良組合、市教育委員会の立会いのもと、遺跡範囲を確認した。

事業は、昭和57年夏から工事が進められるため、市教育委員会は県の補助を受けて、昭和57年7月21日から現地調査を開始した。

昭和57年7月21日、現地において鍬入式を行い、発掘調査に着手した。現地調査は9月20日に終了し、引き続いて歴史民俗資料館高山市郷土館において報告書作成作業に入った。

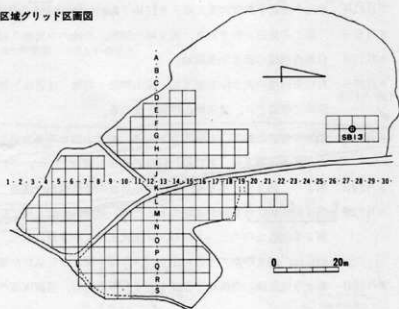
調査方法は、調査区域を4mグリッドに設定して行い、表土除去、床土排除、遺構検出、遺構実測、写真撮影の順で作業を進めた。調査日誌の概要を以下に記する。

- 7月21日 発掘関係者立会いのもとに鍬入式を行う。基準クイを打ち、表土除去を開始する。
- 7月28日 台地東南端の表土除去が完了し、床土排除を始める。火山灰層（黄褐色ローム層）までの表土が20～30cmと薄く、全域の攪乱状態が確認された。遺物は、表土から縄文土器片、石器等が出土している。
- 7月29日 台地南端にある「塚」（第1号近世墓）について地元の土地所有者から「言い伝え」を聴取、過去に人為的な攪乱があったと知らされる。
- 7月31日 台地中央寄り部分の表土除去を開始する。
- 8月6日 「塚」の集石を取り除き、表土除去開始。台地の中央寄り部分の床土排除を開始。
- 8月11日 台地南西端の表土除去開始。
- 8月17日 台地南西端の表土除去完了し、床土排除を開始。住居址と確認できるプランが9箇所で確認され、遺構検出作業を進める。
- 8月19日 第8号住居址から、石錐、フレーク、縄文土器片等多数出土。石組炉も確認された。また、第9号、第10号住居址の検出も開始したが、その先後関係に苦労する。
- 8月22日 第1号、第2号、第6号、第7号住居址の遺構検出を開始。
- 8月23日 第3号住居址の東側が道路であるため、地元の了解を得て掘り下げることにする。第9号住居址内のピットから、弥生式土器片が多量に出土。第10号住居址の覆土からは、縄文中期の土器が出土し、ほぼ中央には石組炉が確認された。
- 8月25日 第8号住居址の遺構検出作業を終了、写真撮影、遺構実測作業を進める。

H17～19グリッドにおいて、第11、12号住居址が確認されるが、プランは不明瞭である。

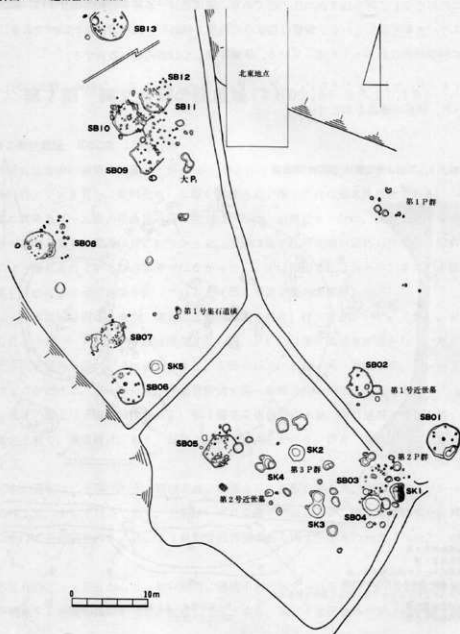
- 8月30日 第1～5号住居址の検出作業を進める中で、縄文土器等遺物が多量に出土している。第1号住居址は炭片が多く散在し、磨製石斧、縄文土器の大破片（腹部）が出土し、石組炉が発見された。第2号住居址は、近世墓に東南壁の一部が切られていることが確認された。
- 9月2日 第6号、第7号住居址の遺構検出作業を終了。写真撮影、遺構実測作業を進める。第6号住居址からは石炉組が確認された。第4号住居址から押型文土器が出土、縄文早期の遺構であると考えられる。
- 9月4日 台地南端にピット群、土壌3基が検出された。
- 9月6日 第2号土壌と第4号土壌から押型文土器が出土。
- 9月7日 J6グリッドから近世墓が発見され、礎の下部より人骨の一部が出土。
- 9月8日 高山警察署、須田圭三医師の立会いのもと、第2号近世墓覆土を除去し、頭蓋骨と大腿骨の一部が確認された。台地北側の表土除去を開始。
- 9月9日 K18, 19, L18～22, グリッド付近の傾斜地から大量に縄文土器、石器が出土し、この地点の検出を開始。この地点を北東地点と呼称する。
- 9月10日 台地北側第13号住居址のプランが確認される。
- 9月16日 第13号住居址の検出作業を終了、写真撮影、遺構実測作業を進める。
- 9月20日 特殊区の遺物包含層の調査を終了。本日をもって現地調査を終了した。

挿図6 調査区域グリッド区画図



現地調査終了後、遺物を高山市郷土館に移し、当館2階事務室で報告書作製に着手した。  
 本遺跡発掘調査で確認された遺構は、縄文早期の住居址1基、縄文前期の住居址5基、縄文中  
 期の住居址6基、弥生時代の住居址1基、その外土壇5基、ピット群3箇所、大ピット1箇所  
 集石遺構3箇所、大量の土器包含層北東地点1箇所、近世墓2基などである。

挿図7 遺構全体平面図





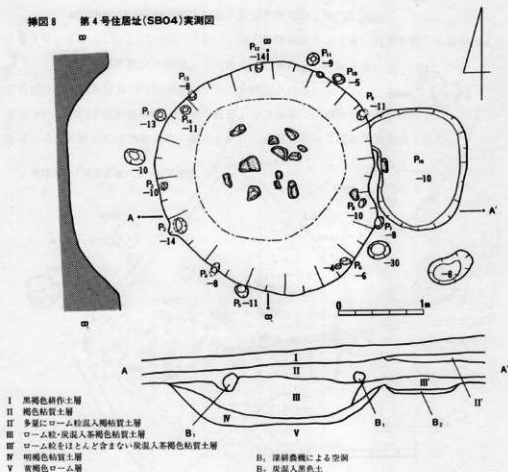
# 第3章 遺構と遺物

## 第1節 縄文早期の住居址(SB04)

本住居址は、台地南部の基部に近い部分のO5・6グリッドに検出された。東西2.6m×南北2.7mに円形をなして掘り込まれた住居址である。黄褐色ローム層を約40cm掘り下げ、底面の平坦なスリバチ形を呈している。側壁は約60度の角度で傾斜し、底部面積は2.25㎡である。壁の上部に14箇所の柱状ピットが巡っている。床面に接して12個の礫が散在する。

ピット(P<sub>1</sub>～P<sub>14</sub>)のうちP<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>、P<sub>9</sub>、P<sub>12</sub>、P<sub>13</sub>は斜め(壁面に対し直角)に掘られ、住居の構造を示している。

挿図8 第4号住居址(SB04)実測図



本住居址の覆土は、ローム粒と炭が混入する茶褐色粘質土層(第Ⅲ層)と明褐色粘質土層(第Ⅳ層)で構成される。

遺物は、覆土の上部である第Ⅰ～Ⅱ層において、縄文中期初頭の半截竹管文と斜縄文の土器を見る。第Ⅲ層下部から第Ⅳ層にかけて、縄文早期の楕円押型文(2種)、網目状捺糸瓦痕文、貝殻条痕文の土器を出土する。楕円文は、土器の裏面に斜めの沈線が入る高山寺タイプの押型文土器である。

石器は、特殊スリ石、削器、凹石等が見られる。

## 第2節 縄文前期の住居址(SB02,05,07,11,13)

### 1. 第2号住居址 SB02(挿図9)

本住居址は台地の南東に位置し、N9・10、O9・10に検出された。東西3m、南北4.05mのほぼ楕円形プランを有し、黄褐色ローム層を掘り込んで構築された竪穴住居址である。

周壁の黄褐色ローム層の掘り込みは東壁で12～15cm、南壁で8～17cm、西壁で7～8cm、北壁で8～12cmを測り、周溝は見られなかった。床面は僅かに硬化面が認められたが、深耕農業機械により攪乱されているため顕著ではなかった。炉は検出されなかった。また、本住居址東南部を僅かに第1号近世墓が切っている。(第1号近世墓の項参照)

ピットは本住居址内に9箇所、周辺に2箇所確認された。柱穴はP<sub>2</sub>～P<sub>6</sub>、P<sub>8</sub>、P<sub>9</sub>と考えられる。P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>、P<sub>7</sub>には炭片が見られ、P<sub>5</sub>には僅かに焼土が遺存していた。

また本住居址外東南のP<sub>10</sub>は袋状を呈し、土器片18点、石鏃1点、石錐1点、フレーク3点、チップ4点が出土し、P<sub>11</sub>からは、半截竹管文土器一個体分40片が出土している。

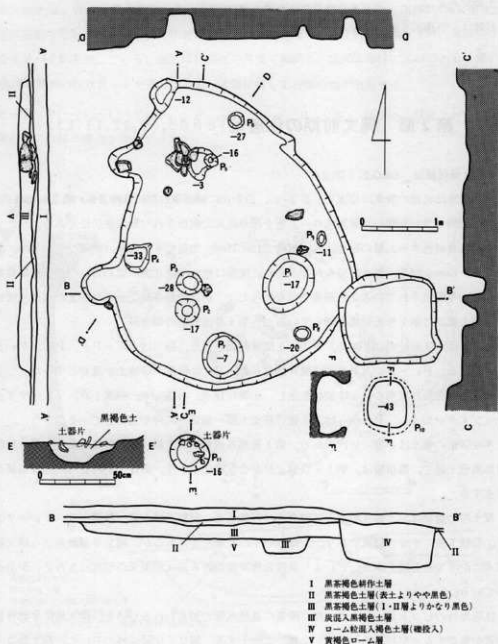
本住居址の覆土は3層に分けられる。第Ⅰ層黒茶褐色耕作土層、第Ⅱ層黒茶褐色土層、第Ⅲ層黒褐色土層で、第Ⅲ層は、第Ⅰ・Ⅱ層よりかなり黒色がかかり、第Ⅱ、第Ⅲ層内には礫14個が存在する。

覆土中の遺物は、土器片39点、石鏃2点、石錐2点、打製石錘1点、削器2点、フレーク3点、石核1点、チップ11点であり、土器はいずれも細片ではあるが、縄文早期終末から縄文前期末にかけての形式をみる。P<sub>1</sub>より貝殻背面押捺のある縄文前期末の形式(九合Z)が出土している。

住居址外のピットP<sub>10</sub>からは、細い隆帯に連続爪形に加えられるものと、縄文地に半截竹管の帯が横走る中期初頭の形式とが混在して出土する。同じく住居址外のP<sub>11</sub>の一括土器は、

口縁部に3条の隆帯爪形文による渦巻文が施されるキャリバー土器で、胴部以下は無文の北陸系中期前葉の土器である。

挿図9 第2号住居址(SB02)実測図



## 2. 第5号住居址 SB05 (挿図10, 11)

本住居址は、台地南側に位置し、J 7・8、K 7・8グリッドに検出された。プランは一部不明瞭であるが、長軸4.4m、短軸3.4mの隅丸長方形プランを有すると考えられ、黄褐色ローム層を掘り込んで構築された竪穴住居址である。

周壁は遺存状態が悪く、北東壁で7~11cm、南東壁で8~12cm、南西壁で5~8cm、北西壁で4~12cmの立ち上がりが見られる。中央部やや西側に、東西65cm×南北90cmの焼土が観察され、地床炉と考えられる。床面は明瞭ではなく、深耕農業機械による溝状の痕跡が残る。

ビットは住居址内に大小24箇所、住居址外に10箇所見られる。

大型ビットP<sub>12</sub>は、住居址の東隅を切って作られている。住居址内で深さ20cmを越えるビットは17箇所、垂直に掘られるP<sub>10</sub>、P<sub>11</sub>、P<sub>13</sub>、P<sub>14</sub>、P<sub>31</sub>は柱穴と考えられる。P<sub>19</sub>は袋状をなす深いビットで、内部に縄文土器片、石鏃、フレーク、及び自然礫の集合がみられ、貯蔵穴とみなされる。P<sub>18</sub>の上部(床面上10cm)には、径1mの環状をなす礫の集合があり、凹石、

挿図10 SB05内の黒石遺構実測図



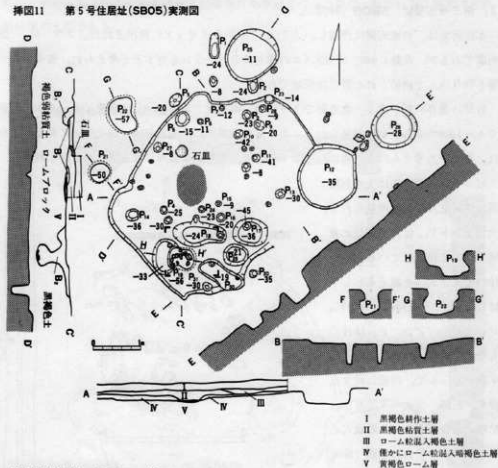
挿図11の□内

スリ石各1点が含まれる。住居址廃棄後に作られた墓址とも考えられる。(挿図10)

本住居址の覆土は、第I層黒褐色耕作土層、第II層黒褐色粘質土層、第III層ローム粒混入褐色土層、第IV層僅かにローム粒混入暗褐色土層で構成される。

覆土中の遺物は、少量の縄文早期土器(楕円、菱形押型文各1点)を除くほとんどが、縄文前期中葉~後葉に属し、諸機b式を主体とする様々な土器が見られる。斜縄文のみの土器が最も多く、次いで貼付隆帯に竹管の加えられるもの、半截竹管による平行線文等がある。石器は、石鏃、石錐、石匙、磨製石斧、スリ石、石皿等約40点が出土した。

挿図11 第5号住居址(SB05)実測図



### 3. 第7号住居址 SB07 (挿図12)

本住居址は、台地の西端に位置し、F・11、G・11グリッドに検出された。このグリッドは本調査着手以前に、表土面の観察によって住居址の存在が想定された部分である。

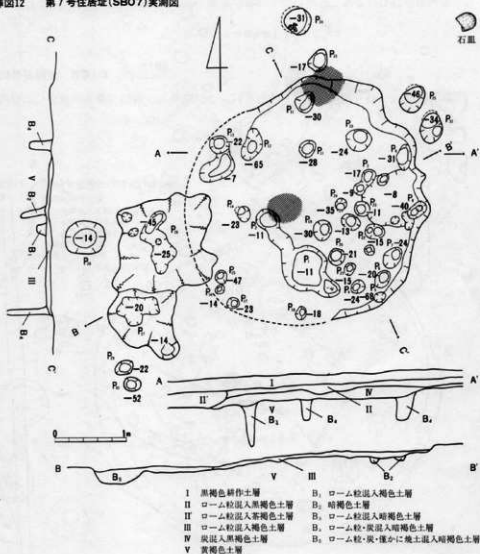
本住居址は、黄褐色ローム層を浅く掘り込んで作られた竪穴住居址と推定されるが、プランは明瞭ではない。レベルの異なる焼土2箇所、硬化面(床面?)2箇所が認められ、住居址の重複が考えられる。ピット群の配列から、南北3.2mの円形プランの竪穴住居址が1基確認された。周壁は、東壁が8~15cm遺存するが、西壁は失われている。また、掘り込み地床炉(50×43cm)と、床面の一部が見られる。

ピットは住居址内に24箇所、住居址外に10箇所が検出された。P<sub>19</sub>~P<sub>24</sub>のピット群の性格は不明であるが、P<sub>4</sub>~P<sub>18</sub>の配列は、壁にそった柱穴の可能性が高い。特にP<sub>5</sub>、P<sub>12</sub>は60cmを越える垂直深掘りピットである。また、住居址西方の一段低い硬化面とピット(P<sub>28</sub>~P<sub>30</sub>)は、住居址の一部とも考えられるが、攪乱が著しく詳細は不明である。

覆土中の遺物は、石器類が多く検出され、石鏃、石錐、石匙、削器等がみられる。土器は、

風化の著しい破片が多い。連続爪形文、刻目入突帯文、爪形文帯区画擦消縄文など、諸磯b式、北白川下層Ⅱ式に対比されるものがみられる。

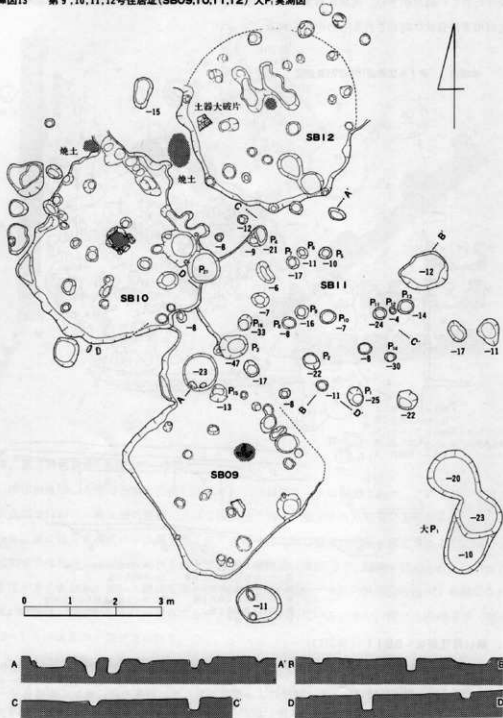
挿図12 第7号住居址(SB07)実測図



#### 4. 第11号住居址 SB11 (挿図13)

本住居址は、台地のほぼ中央に位置し、H18グリッドに検出された。黄褐色ローム層を掘り込んで構築された竪穴住居址である。耕作による擾乱が著しく、西南方向に僅かに黄褐色ローム層を掘り込む長さ90cm、高さ20cmの壁面と考えられる部分を検出したが、大部分は消失しており検出不可能であった。また、この壁面から東方向へ1.3mの地点に、炉跡と推定される少量の焼土が検出され、炉跡の南西約3㎡の範囲に床面が確認された。

挿図13 第9,10,11,12号住居(SB09,10,11,12) 大P1実測図



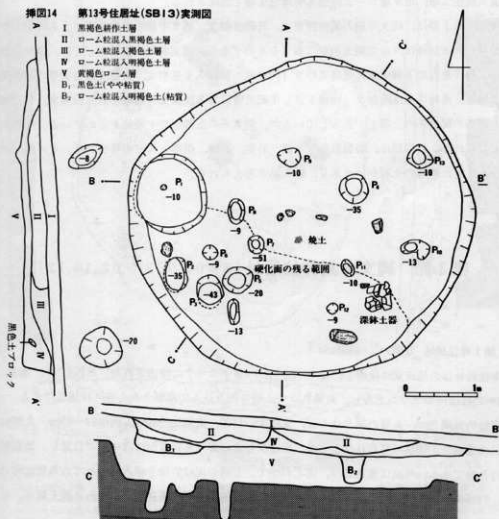
ピットは、20箇所に検出された。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>16</sub>、P<sub>7</sub>、P<sub>11</sub>の列が、相対する深掘りピットである。P<sub>s</sub>から縄文前期の丹砂土器、無文口縁部破片等が出土した。

住居内に遺物はほとんど見られず、僅かに縄文中期の隆帯文土器の破片が2点出土したにすぎない。

本住居址は、北接する第10号あるいは12号住居址とそのピット(P<sub>21</sub>)によって切られており、P<sub>21</sub>の土器とともに時期判定の根拠とした。縄文中期の土器は第10、あるいは12号住居址からの流入と考えられる。

### 5. 第13号住居址 SB13 (挿図14)

本住居址は、台地の北東に位置し、F27・28、G27・28グリッドに検出された。東西4.85m、





南北4.40mの円形プランを有し、黄褐色ローム層を掘り込んで構築された竪穴住居址である。

地形の北東への傾斜により、周壁の黄褐色ローム層の掘り込みは、南西部で47~31cmを測るが、北東部では10~13cmと浅くなっている。また深耕農業機械が南西方向より4条の痕跡を残して北東部の壁面及び床面を損傷している。炉は、本住居址中心より30cm南寄りの地点に、僅かに焼土が認められ、地床炉であったと思われる。

床面は、住居址南部において硬化面が認められたが、他の部分は耕作により、不明瞭であった。また南東部床面上において、全面縄文の深鉢土器半個体が密着していた。

ビットは、住居址内に13箇所検出されたが、規格性は認め難く、柱穴の位置は不明である。P<sub>1</sub>は貯蔵穴である。またP<sub>2</sub>は北に傾斜を見せる。P<sub>13</sub>は後世の攪乱であった。

本住居址の覆土は、第I層黒褐色耕作土層、第II層ローム粒混入黒褐色土層、第III層ローム粒混入褐色土層、第IV層ローム粒混入明褐色土層で構成される。

覆土中の土器は、縄文早期の菱形押型文、貝殻沈線文、縄文中期の半截竹管による隆帯文が少量見られる以外は、全て縄文前期に属するものである。縄文前期の土器としては、条痕調整無文土器（北白川下層I式）、連続爪形文（同II式）、側線入り爪形文、突帯上刻目文等の関西系の土器と、連続爪形浮隆線文（諸磯b式）、半截竹管による沈線文（諸磯c式）、斜縄文、列孔浅鉢土器等の関東系の土器とが混在しているが、関東系の土器がや、優位を占めている。丹彩土器も見られる。石器類は、磨製石斧、石鏃、石匙、石錐、削器、スリ石等がある。その他、オパール化した巻貝の化石が一点あり、搬入品と考えられる。

### 第3節 縄文中期の住居址（SB01,03,06,08,10,12）

#### 1. 第1号住居址 SB01（挿図15）

本住居址は台地南東に位置し、Q7・8、R7・8グリッドに検出された。東西4.5m、南北4.7mのほぼ円形プランを有し、黄褐色ローム層を掘り込んで構築された竪穴住居址である。

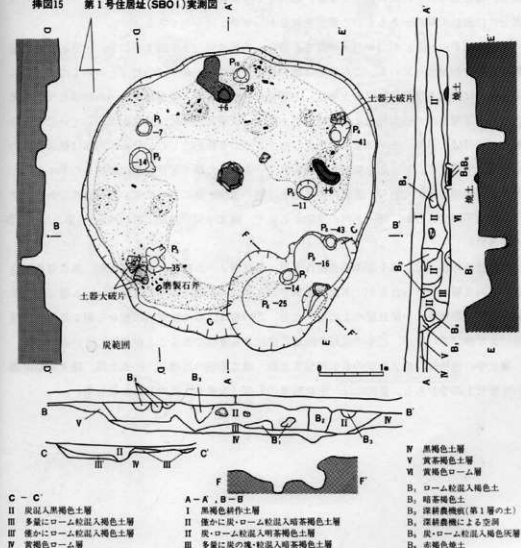
周壁の黄褐色ローム層の掘り込みは、東壁4~13cm、南壁28~30cm、西壁12~23cm、北壁11~21cmを測り、周溝は見られなかった。炉は少し北に寄っているがほぼ中央に位置し、遺存状態は良好である。規模は東西42cm、南北43cmで、6個の流紋岩礫を組み合わせで六角形に作る。内部の土層は第I層が炭とローム粒が混じった灰色灰層、第II層が赤褐色の焼土層で、その下部は黄褐色ローム層となっている。

床面は全体に硬化面が見られ、遺存状態は良好である。また、床面と床面上部14cmまでの層には、炭の棒状塊、炭片が多量に遺存し、その範囲は住居址内全体に及ぶ。また、住居址内北側と東側の一部には、赤褐色焼土面が見られ、周辺にはより多くの炭片が散乱していた。

ピットは10箇所確認され、その内柱穴は、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>、P<sub>7</sub>、P<sub>8</sub>、P<sub>10</sub>と考えられる。P<sub>6</sub>、P<sub>9</sub>は貯蔵穴と考えられる。

床面上の遺物は、本住居址北東部に縄文のみの深鉢土器胴部大破片、南西部にも同じく大破片と磨製石斧1点が検出された。覆土中の遺物は、土器片117点、石鏝4点、石錐2点、凹石1点、削器1点、フレック7点、石核1点、チップ15点である。

挿図15 第1号住居址(SB01)実測図



土器は、早期の菱形押型文土器1点、前期の連続爪形文土器1点を除く大部分が中期前葉に属するものである。貝殻による圧痕列と口縁内面に縄文の施される土器や、隆帯両側に半截竹管文の入る土器等、船元Ⅱ式に比定される土器が見られる。

## 2. 第3号住居址 SBO3 (挿図16, 17)

本住居址は、台地南部のO6・7, P6・7グリッドに検出され、第5号住居址の東方約16mに位置する。東西70cm×南北67cmの範囲に焼土が観察され、ピットも検出されたが、耕作による削平等で周壁は確認されなかった。

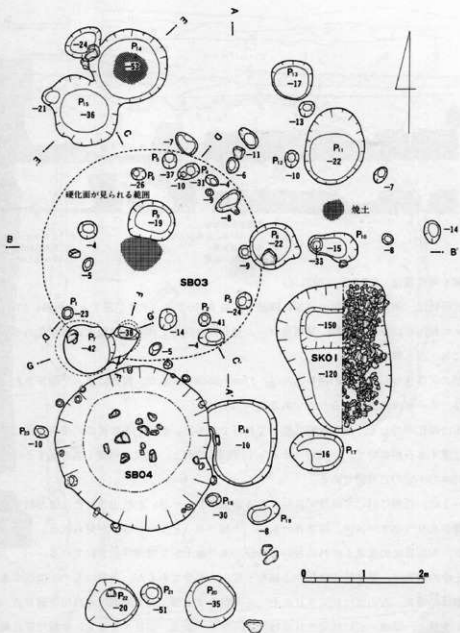
東西3.65m×南北3.5mの範囲に床面上の硬化面が認められた。硬化面は焼土周辺が特に顕著で、周辺部へゆくに従い軟弱となる。遺存する床面範囲とピットの位置から、挿図16の点線部分に住居址の範囲があるものと推定されるが、プランは不明である。

ピットはP<sub>1</sub>～P<sub>8</sub>が23～41cmの深さを持ち、内部は褐色土で埋まる。P<sub>1</sub>・P<sub>5</sub>からは前期の土器片が出土している。これらとは別の覆土を持つ30～40cm径のピットがいくつか見られる。P<sub>7</sub>は袋状を呈し、内部の土層は、上層部が明褐色土層、中層部がローム粒混じりの黒褐色土層、下層部がローム粒混じりの暗褐色土層で、下層部東側には炭片が混入していた。またP<sub>8</sub>の内部は、黒褐色土で埋まり、炭化したクルミが多数出土した。P<sub>8</sub>の内部は炭混じりの暗褐色土で埋まり、焼土面を切断して掘られている。また第2ピット群に総括したP<sub>10</sub>、P<sub>16</sub>、P<sub>17</sub>等も同様の覆土であり、前述の住居址とは別の遺構が後に作られていた可能性がある。プラン等は不明であるが、ピット内の遺物から見て、縄文中期の時期と思われる。(第2ピット群の項参照)

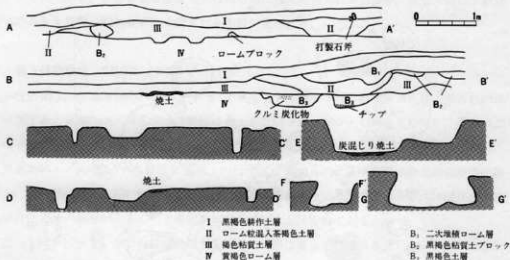
本住居址の覆土は、第Ⅰ層黒褐色耕作土層、第Ⅱ層ローム粒混入茶褐色土層、第Ⅲ層褐色粘質土層の3層に分けられるが、本住居址東方からP<sub>8</sub>の上部にまで二次堆積ローム層(桜ヶ丘礫層の二次堆積層)が第Ⅱ層の上に見られた。この層は、台地南側の山麓から第4号住居址周辺にまで伸びているが、近年の道路や畑地造成による擾乱であることが判明している。

覆土中の遺物は、縄文早期の菱形押型文土器、縄文前期の諸磯b、c式土器、縄文中期前葉の竹管文土器等がある。量的には、中期前葉のもの(北裏cⅠ式対比)が最も多い。

挿図16 第3, 4号住居址(SBO3,04) 第1号土壇(SKO1) 第2ピット群実測図



挿図17 第3号住居址(SB03)土層断面図



### 3. 第6号住居址 SB06 (挿図18)

本住居址は、第7号住居址の南側に隣接し、G9・10グリッドに位置する。長軸4.93m、短軸3.57mの楕円形プランを有し、黄褐色ローム層を掘り込んで作られた竪穴住居址である。長軸方向はN-28°-Wを示す。

周壁の黄褐色ローム層への掘り込みは、12cm~25cmであるが、耕作によって削平され、北西壁では、6~8cmの壁が残るのみである。

床面は硬化が著しく、遺存状態は極めて良好であった。炉は、本住居址の中央より、やや北側に位置する石組み炉で、川原石(チャート・砂岩)7個と、流紋岩角礫1個を配する内径25.5cm×26cmの小型の方形炉である。

ピットは、長軸に対してほぼ対称形となる位置にP<sub>1</sub>~P<sub>8</sub>が検出された。また側壁にそって周溝が走り(巾8~10cm、深さ3~5cm)小ピット(P<sub>11</sub>~P<sub>19</sub>)が見られる。

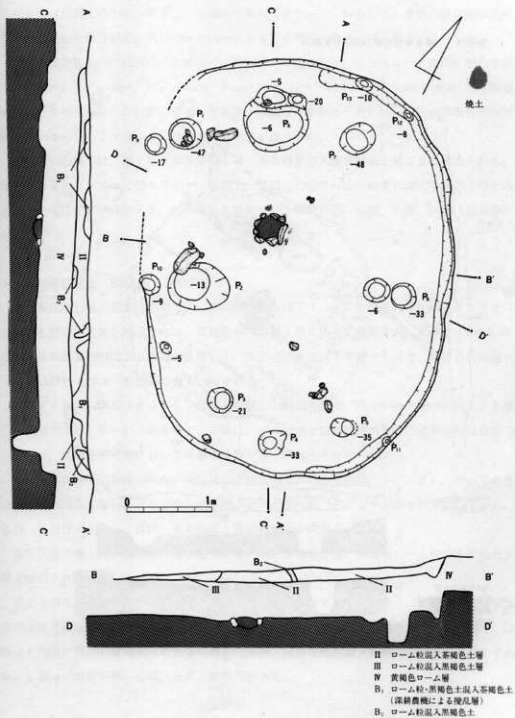
なお、本住居址の北東1m外において長径30cmの焼土が1箇所確認されている。

覆土中の遺物は、風化度の著しい小破片土器が大部分であるが、各期のものが混在する。縄文早期は<sup>オキナ</sup>船畑式、石山式に比定されるセンイ入刺突文土器。縄文前期は北白川下層II式の丹彩土器が少量と、諸磯b式に比定される竹管文、コンパス文、刻目入突帯文、半截竹管沈線文土器と列孔浅鉢土器。縄文中期は隆帯文、縄文等の土器が見られる。

石器は、石鏃が多数出土し、その外に石匙、石錘、削器等がある。

本遺構の時期認定にあたっては、遺物の包蔵状態の所見による決定には困難を伴った。従って遺構のプラン及び石組み炉の存在を含めた総合的な判断により中期の<sup>江古田</sup>範疇に位置付けておきたい。

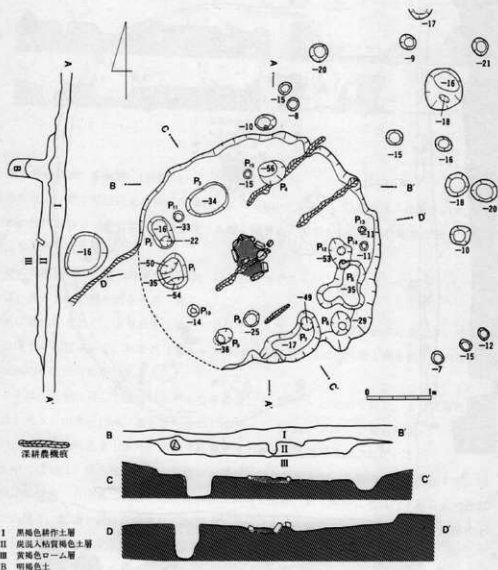
挿図18 第6号住居(SB06)実測図



#### 4. 第8号住居址 SBO8 (挿図19)

本住居址は台地中央部西側に位置し、D14・15、E14・15グリッドに検出された。東西3.77m、南北3.6mの円形プランを有し、黄褐色ローム層を浅く掘り込んで構築された竪穴住居址である。

挿図19 第8号住居址(SBO8)実測図



周壁の黄褐色ローム層への掘り込みは、北東部で8~16cmを測る。床面の大部分に硬化面が認められたが、南西方向より深耕農業機械が西壁面及び床面を破壊し、更に石組み炉の一部を移動させている。

石組炉は住居地の中心に位置し、7個の川原石(チャート・砂岩)と、東側に柱状節理流紋岩1個を配した長方形で、内径40cm×50cmである。長軸方向はN-10°-Wを示す。

ビットは住居地内に15箇所、住居地外に17箇所が検出された。柱穴は4~6箇所と想定され、P<sub>2</sub>-22cm, P<sub>3</sub>-34cm, P<sub>4</sub>-56cm, P<sub>12</sub>-53cm, P<sub>7</sub>-49cm, P<sub>9</sub>-38cmを測る。P<sub>1</sub>は深鉢土器下半無文部破片が壁面に密着しており、埋甕ビットかとも思われる。玄武岩製石匙が伴出した。またP<sub>7</sub>より土器片、P<sub>8</sub>よりチップが出土した。

本住居地の覆土は、第I層黒褐色耕作土層、第II層炭混入粘質褐色土層により構成される。覆土中の遺物はわずかに船元II式と、曾利I~III式に比定される信州系の縄文中期の土器をみるが、主体は曾利III式である。石器は定角磨製石斧、粗製石匙、石鏃、石錐、凹石、石皿等がある。

#### 5. 第10号住居地 SB10 (挿図20)

本住居地は台地の東北に位置し、G18・19, H18・19グリッドに検出された。隅丸方形プランを有する竈穴住居地と推定される。黄褐色ローム層を掘り込んで構築され、東西径3.7mを測るが、深耕農業機械による破壊が甚だしく、南北径の測定は不可能であった。周壁の黄褐色ローム層の掘り込みは、南西部で最大23cmを測定した。

炉は、6個の川原石(チャート・砂岩)を配した石組み炉で、内径60cm×48cmの長方形を呈し、主軸方向は、N-47°-Wを示す。床面は、炉の付近と住居地南西部での遺存状態は良好であったが、住居地東北部においては遺存状態が悪く確認できなかった。

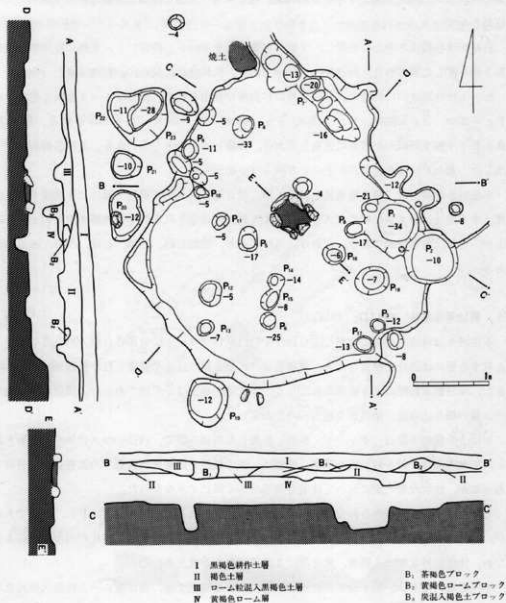
ビットは19箇所に検出された。住居地の主柱穴と思われるものは、P<sub>1</sub>, P<sub>4</sub>, P<sub>6</sub>であるが、相称とはならない。P<sub>7</sub>より石錐2個、P<sub>17</sub>より石匙、P<sub>1</sub>より土器片が出土している。なお、住居地外北部に1箇所、東北部に2箇所の焼土が検出された。

本住居地の覆土は、第I層黒褐色耕作土層、第II層褐色土層、第III層ローム粒混入黒褐色土層で構成される。

出土土器は、粘土紐による隆線文、半截竹管文を主体とするものが多く、口唇内側に蓮華文状の沈線のあるもの(蓮華文の先駆形態)、口唇と口頭部に半截竹管の列を伴う無文浅鉢片、口唇上と内面に円形竹管の刺突のある突帯文土器等、縄文中期前葉(新崎式)に属するものである。石器は、磨製石斧、石鏃、石錐、削器等がある。



挿図20 第10号住居址(SB10)実測図



## 6. 第12号住居址 SB12 (挿図21)

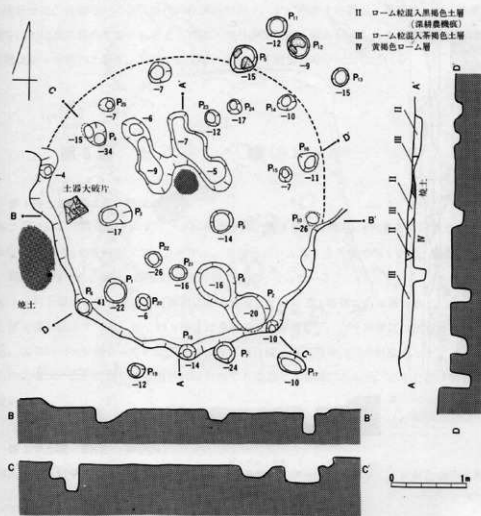
本住居址は台地の北東部に位置し、H19グリッドに検出された。この地点も、深耕農業機械による攪乱が甚だしく、東側の壁面は破壊されているが、残存壁面の高さは6~14cmを測り、黄褐色ローム層を振り込んで構築された竪穴住居址である。東西径3.8mを測り、残存する壁面に見られる柱穴の配列からみてほぼ円形プランを有すると想定される。

床面は、南西部に一部が残るのみである。また中央に地床炉（東西22cm×南北20cm）が検出された。住居址内外に25箇所のピットが認められる。周壁面において、P<sub>5</sub>～P<sub>7</sub>、P<sub>10</sub>、P<sub>14</sub>、P<sub>16</sub>、P<sub>18</sub>、P<sub>25</sub>は環状を呈している。P<sub>2</sub>、P<sub>8</sub>からは土器片、炭片が出土し、貯蔵ピットと考えられる。

本住居址の覆土は、第Ⅱ層ローム粒混入黒褐色土層、第Ⅲ層ローム粒混入茶褐色土層で構成される。

覆土中の遺物は、北陸系縄文中期前葉土器（半截竹管、隆帯）半個体を主要なものとする。床面付近では、縄文のみの土器及び列孔浅鉢片、爪形文等の縄文前期後半の土器が見られた。P<sub>2</sub>内の土器は、薄手無文皿形土器である。石器は、石鏃、石錐、小型石匙等がある。

挿図21 第12号住居址(SB12)実測図

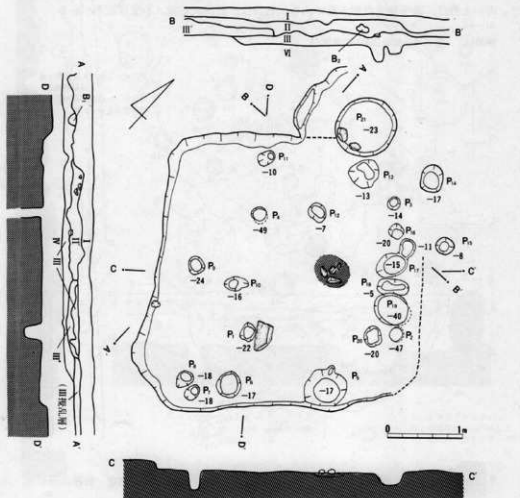


## 第4節 弥生時代の住居址(SB09)

### 1. 第9号住居址 SB09 (挿図22)

本住居址は台地の北東部に位置し、G17・18、H17・18グリッドに検出された。隅丸方形プランを有し、黄褐色ローム層を掘り込んで構築された竪穴住居址である。当地点は、深耕農業機

挿図22 第9号住居址(SB09)実測図



- I 黒褐色耕作土層
- II 黒褐色土層
- III 微かにローム粒混入黒色土層
- IV ローム粒混入茶褐色土層
- V 茶褐色土層
- VI 黄褐色ローム層

- B<sub>1</sub> ローム粒混入明褐色土ブロック
- B<sub>2</sub> 黒色土ブロック

械による破壊が著しく、東南壁は3.6m、北西壁は1.7m遺存していたが、北東部の壁面は確認し得なかった。住居室内覆土の所見から、プランは短軸（南西壁）3.6m長軸3.8mと推測される。南西壁の方向はN-35°Wを示し、主軸方向と推定される。周壁の黄褐色ローム層の掘り込みは検出可能な部分において4~14cmを測る。また北東壁面の一部が、第11号住居址と重複してこれを切っている。

床面には数条の深耕農業機械の痕跡が残るが、ほぼ良好に遺存している。炉は、浅い掘り込みの地床炉で、土器もたせ用の石が4個配置されている。

住居址内の21箇所に円形ピットが検出された。主柱穴は4箇所（P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>）でP<sub>1</sub>-22cm P<sub>2</sub>-47cm、P<sub>3</sub>-14cm、P<sub>4</sub>-49cmを測り、いずれも細く垂直に掘られている。P<sub>8</sub>から該当期の弥生式土器23点が出土した。

本住居址は、向畑唯一の弥生時代の住居址であり、P<sub>8</sub>内出土の器台、<sup>（糸掛まじい）</sup>拂插波状文、条痕文の甕等は欠山期に該当する。石器としては、有孔磨製石鏃、砥石がみられる。その他住居址内より縄文前・中期の土器片、石鏃が出土し、P<sub>10</sub>より磨製石斧が出土している。

## 第5節 土 塚（SK1~5）

### 1. 第1号土塚 SK1（挿図23）

本土塚は、台地南部のP6 グリッドに検出され、第4号住居址の1.6m東方に位置する。東西1.8m、南北2.5mの長円形プランを有する。黄褐色ローム層を急角度で掘り込み、最深部で1.5m、最浅部で1.2mを測り、底面は中央付近で二段になっている。

本土塚の土層は、第3号住居址周辺にまで堆積していた二次堆積ローム層（B<sub>1</sub>）が、本土塚上部で落ち込んでいる。B<sub>1</sub>の下層には多量の集石が遺存し、その中には凹石、打製石斧、磨石、スクレパーが混じっていた。それより下層は擾乱層で遺物は見られなかった。

この土塚は、近年において掘削されたものであることは明確であるが、この目的は明らかではない。

### 2. 第2号土塚 SK2（挿図24）

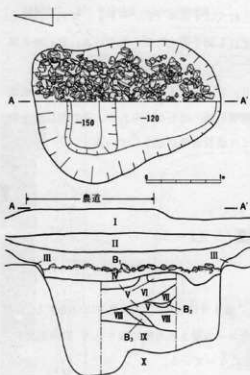
本土塚は、M7グリッドにおいて検出された。径2×2mの円形を呈し、黄褐色ローム層をスリバチ状に掘り込んで作られ、深さは63cmを測る。

土塚内覆土は、上部は茶褐色土層、中部は明褐色土層、下部は暗褐色炭まじり非粘質土層で、

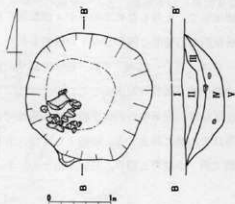
下底に接して大小の礫19個が集積している。

遺物は、縄文早期楕円押型文土器（2種類）条痕文土器の外に上層より半截竹管沈線文土器少量が出土している。石器は削器1点、打製石斧1点、フレーク等がある。

挿図23 第1号土壌(SK 1)実測図



挿図24 第2号土壌(SK 2)実測図



- I 黒褐色粘土層(一部農道)
  - II 褐色粘質土層
  - III ローム粒混入黒褐色土層
  - IV 礫層
  - V ローム粒混入褐色土層
  - VI ローム粒混入明褐色土層
  - VII 明褐色土層
  - VIII 黒色粘炭入褐色土層
  - IX ローム・黒色粘炭入褐色土層
  - X 黄褐色ローム層
- B<sub>1</sub> 板ヶ丘礫層が混入する二次堆積ローム層  
 B<sub>2</sub> 黒色土ブロック  
 B<sub>3</sub> ロームブロック

層Ⅰ-ローム層  
 層Ⅱ-黒色粘炭入褐色土層  
 層Ⅲ-黒色粘炭入褐色土層  
 層Ⅳ-ローム層  
 層Ⅴ-ローム粒混入褐色土層  
 層Ⅵ-ローム粒混入明褐色土層  
 層Ⅶ-明褐色土層  
 層Ⅷ-黒色粘炭入褐色土層  
 層Ⅷ-黒色粘炭入褐色土層  
 層Ⅹ-黄褐色ローム層

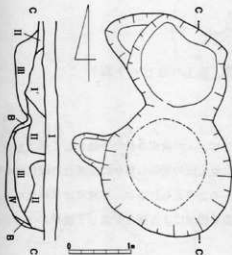
### 3. 第3号土壌 SK3 (挿図25)

本土壌は第2号土壌の南方約3mに位置し、M5・6グリッドに検出された。径2.1mと径1.5mの2個のビットが重複する大形の土壌で、黄褐色ローム層を掘り込んで作られる。深さは60cmと45cmを測り、底部は丸くなっている。

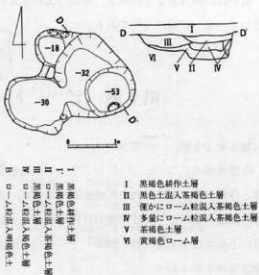
本土壌内覆土上部は黒褐色土(第I層)とローム粒混入茶褐色土(第II層)が不整合に堆積し下部は黒褐色土層(第III層)ローム粒混入褐色土層(第IV層)となる。

遺物は、縄文前期の諸磯c式に対比される連続押引半截竹管文、沈線文、縄文土器がある。他にスリ石、フレーク等がある。

挿図25 第3号土壌(SK 3)実測図



挿図26 第4号土壌(SK 4)実測図



Ⅰ 黒褐色耕作土層  
Ⅱ 黒土混入茶褐色土層  
Ⅲ 黄褐色耕作土層  
Ⅳ 黒土混入茶褐色土層  
Ⅴ 茶褐色土層  
Ⅵ 黄褐色ローム層

Ⅰ 黒褐色耕作土層  
Ⅱ 黒色土混入茶褐色土層  
Ⅲ 僅かにローム粒混入茶褐色土層  
Ⅳ 多量にローム粒混入茶褐色土層  
Ⅴ 茶褐色土層  
Ⅵ 黄褐色ローム層

#### 4. 第4号土壌 SK4 (挿図26)

本土壌は、L7グリッドにおいて検出された。径1.7×2.6mの不整形形を呈し、4つのピットが重複している。黄褐色ローム層を掘り込んで作られ、深さは最深部で53cmを測る。底面は平坦である。土壌内覆土は、上部の黒色土混入茶褐色土と下部の茶褐色土層で構成される。

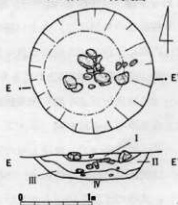
遺物は上部において、縄文早期の高山寺式の楕円押型文、織織入り条痕文、縄文前期の沈線文、縄文土器等がある。下層には、中期五領ケ台、鷹島式の土器が見られる。従って、本土壌の下限は中期前葉と考えられる。石鏝1点も見られる。

#### 5. 第5号土壌 SK 5 (挿図27)

本土壌は、第6号住居址の東方に位置し、H10グリッドに検出された。黄褐色ローム層を36cm掘り込んで作られ、径1.7mの正円形を呈する。底面は平坦である。

層位は第Ⅰ層黒褐色土層、第Ⅱ層炭ローム粒混入褐色土層、第Ⅲ層ローム粒混入粘質暗褐色土層、第Ⅳ層黄褐色ローム層

挿図27 第5号土壌(SK 5)実測図



Ⅰ 黒褐色土層  
Ⅱ 炭・ローム粒混入褐色土層  
Ⅲ ローム粒混入粘質暗褐色土層  
Ⅳ 黄褐色ローム層

土層が整然と堆積する。第Ⅰ層、第Ⅱ層内には、10~30cm大の礫が含まれる。

遺物は、第Ⅱ層より斜縄文、無文の土器片2点、スクレパー、石鏃、剥片、石核各1点が出土している。時期は不明である。

## 第6節 ビット群(第1~3ビット群)

### 1. 第1ビット群 (挿図28)

台地東側のO15・16、P15・16グリッドに10箇所のビットが検出された。総合して第1ビット群と呼称する。ビットと共に焼土も検出され、また焼土面の周辺に僅かに床面状の硬化面が観察されたことにより、この地点に住居址があったものと考えられるが、本地点は黄褐色ローム層の上部が耕作土層(13~24cm)で、現代の深耕農業機械による攪乱が甚しく遺構のプランは確認されなかった。

検出されたビットの内P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>の内部には炭小片が混入している。P<sub>1</sub>からは縄文土器片4点、チップ4点が出土し、P<sub>2</sub>からは縄文土器片20点、スクレパー1点が出土した。またP<sub>4</sub>からは縄文土器片1点、P<sub>5</sub>からは縄文土器片1点、P<sub>6</sub>からは縄文土器片3点、P<sub>7</sub>からはチップ1点が出土した。P<sub>3</sub>、P<sub>8</sub>、P<sub>10</sub>には遺物は見られなかった。

出土した土器は全て4~5cmの小片のみで、風化が著しく、遺存状態は悪いが、竹管による連続刺突のある浮隆線文等が見られる。ビット内の土器には、縄文前期後半から中期の土器が認められる。

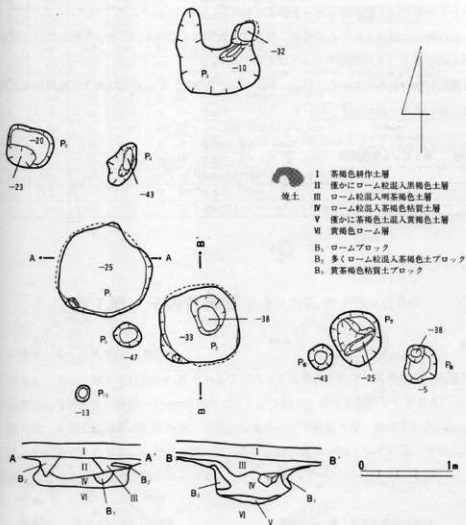
### 2. 第2ビット群 (挿図16, 21ページ参照)

第3号住居址の外側には、大小14箇所のビットが見られる。総合して第2ビット群と呼称する。P<sub>11</sub>の南には径35cmの焼土が残り住居址の存在した可能性もある。

P<sub>10</sub>…第3号住居址の東0.8mにあり、長径80cmの楕円形で、深さ15cm。内部は黒褐色土で埋まり底部付近より削片が多数出土した。縄文中期の縄目土器3点、石鏃、打製石斧各1点もみられる。

P<sub>11</sub>…P<sub>10</sub>の北80cmで、直径1mの円形を呈し、22cmの深さをもつ広いビットである。上部は炭片混じりの暗褐色土、下部は明褐色の粘質土で埋まる。諸磯c式、北白川下層IIc式等の土器片40点あまりが出土したが風化が著しい。スリ石1点もある。

P<sub>13</sub>…径65cmの円形のビットで、17cmの深さを有する。内部はローム混じりの褐色土で埋まり、土器片1点が出土した。



P14 …第3号住居址の北方80cmにあり、径1.2m、深さ53cmの円形ピットである。上部はローム粒混じり暗褐色土で埋まり、炭片が多く含まれる。下部は明褐色ローム混じり粘質土で埋まる。縄文前期末～縄文中期初頭の土器が出土している。

P15 …P14に隣接する径1.1m、深さ36cmの円形ピットである。縄文前期及び中期の土器が出土している。

P16 …第3号住居址の南方85cmにあり、長径1.45m、深さ10cmの浅いピットである。下部は炭混じり黒色土で埋まる。

P17 …P16に隣接する長径90cm深さ16cmの楕円形ピットである。縄文土器片が1点出土した。その他ピット外において中期初頭の十三坊台式比定の土器が出土している。



### 3. 第3ピット群 (挿図29)

台地の南部のL5・6・8, M6・8, N4~7グリッドにおいて第2, 3, 4号 土壌を囲む形で散在する大小のピット群を第3ピット群と呼称する。

ピットは14箇所に確認され、その規模、内容は別表の如くである。(表1参照)ピットは浅い皿状のものが多く、その性格については不明である。

遺物は縄文各期の土器が混在し、P<sub>2</sub>、P<sub>6</sub>からは諸磯期、P<sub>10</sub>からは縄文早期押型土器と、縄文中期初頭の土器が出土している。

挿図29 第3ピット群実測図

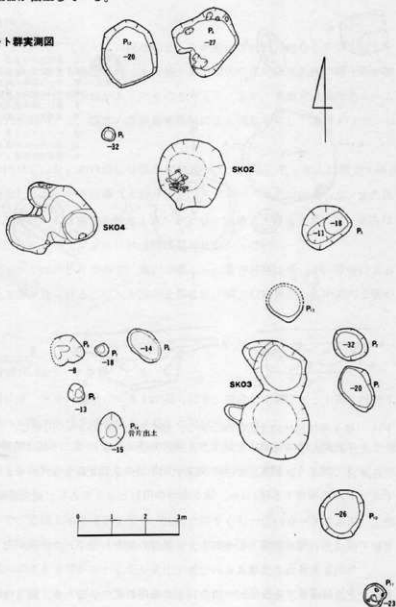


表1 第3ピット群・各ピットの規模、内容

	東	西	南	北	深さ	形態	土質	遺物
P <sub>1</sub>	90	150	-20	皿状	褐色ローム混・サラサラ			
P <sub>2</sub>	100	100	-32	浅円柱	暗褐色・サラサラ・炭まじり		石鏝・フレーク 爪形浮線鏝・縄文	
P <sub>3</sub>	150	120	-18	皿状	暗褐色・サラサラ・炭まじり			
P <sub>4</sub>	200	180	-26	皿状	ローム混・褐色・サラサラ			
P <sub>5</sub>	40	40	-32	柱状	暗褐色			
P <sub>6</sub>	75	120	-14	皿状	明褐色・サラサラ		打製石斧2・石鏝1 ナブ・土器(縄文・洗線文)	
P <sub>7</sub>	40	40	-19	柱状	ローム混・暗褐色・ボロボロ			
P <sub>8</sub>	(110)	80	-6	皿状	明褐色・サラサラ			
P <sub>9</sub>	50	60	-13	皿状	ローム混・暗褐色・ボロボロ			
P <sub>10</sub>	130	140	-26	皿状	黒褐色・褐色ローム混・サラサラ		スリ石・楕円押型文 爪形文・洗線文(早・中期)	
P <sub>11</sub>	70	75	-20	浅円柱	黒褐色・サラサラ・炭・石混		刺突文	
P <sub>12</sub>	160	200	-20	皿状	上部暗褐色・下部ローム混褐色・サラサラ			
P <sub>13</sub>	(110)			皿状	暗褐色・サラサラ			
P <sub>14</sub>	80	105	-15	皿状	暗褐色炭まじり・サラサラ・ブドウ痕あり			

## 第7節 その他のピット (大P<sub>1</sub>, 第1号集石遺構)

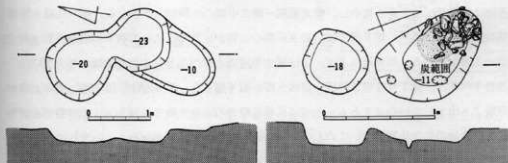
### 1. 大ピット1 大P<sub>1</sub> (挿図30)

本大ピットは、第9号住居址の東方のI17グリッドに検出された。黄褐色ローム層を10~23cm掘り込んで作られ、径80~100cmの円形ピットが3個つながった双円形を呈する。

覆土は、上部が暗褐色非粘質土層、下部が暗褐色のやや粘質土層で構成される。ピット内からは、約40点の土器片と、石鏝、石匙、スリ石、石錘、削器が出土している。土器は、無文列孔浅鉢片などと諸磯期の土器がみられる。

挿図30 大ピット(大P<sub>1</sub>)実測図

挿図31 第1号集石遺構実測図



## 2. 第1号集石遺構 (挿図31)

I 12グリッドの黄褐色ローム層上に検出された集石である。ほぼ長方形にチャート角礫が約20個集積し、少し焼けた痕跡はあるが炭は比較的新しくまだ堅い。石の下は褐色の土層でやはり長方形をなし、底辺部に炭片の混じる小ピットが6箇所みられる。隣接して円形のピット(径60cm)がある。

遺物は、繊維入無文土器片1点のみみられる。

## 第8節 北東地点

### 北東地点 (挿図32, 33)

丘陵中央部において、東方へ丘陵が湾曲し、約2mの段差のある畑地が傾斜しながら東方に広がっている。本来は、なだらかな傾斜面であったものが、かなり古い時代からの埋立てにより段をなして畑地となっているのである。この部分の調査において、極めて多量の縄文時代各期の遺物が出土した。

遺物の包含状態は、後世の耕作面積の拡張作業による埋立ての結果と思われる遺物の二次堆積した部分と、より古い時代の遺物の自然の流れ込みによる堆積の2形態が見られる。また、地形的に見て土器の廃棄場(ごみ捨て場)であった場合も想定する必要があるかもしれない。

調査区は、K16-19、L16-22、M16-18に該当する。時間の制約上調査の及ばなかった部分がいくらかあるが、幸いにして工事計画では、この部分の現状保持が一部可能であった。

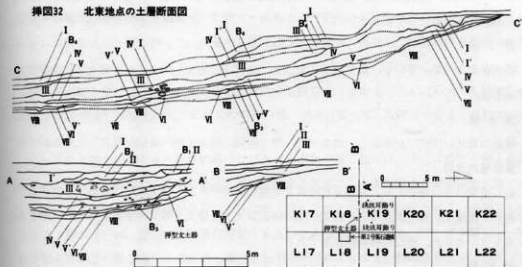
層位は傾斜地であるため一律ではないが、最深部(地表下約1.6m)において、8層に分けられる。第I-III層は確実に後世の埋立てによるものであり、第IV層が本来の地表面であったと思われるが、第V層にも遺物の攪乱、混入が認められる。第VI層は、飛騨地方で初見の赤ホヤ火山灰層であることが判明したが、その生成についてはなお疑問な点が多い。遺物は第VII層にまで認められ、第VIII層は、基盤の黄褐色ローム層となる。

遺物は第III層に最も多く集中し、縄文前期～縄文中期の土器が主体となる。僅かに縄文早期の遺物が混じる。第IV・第V層では、縄文前期の土器が主体で、次いで縄文早期の土器、縄文中期の土器が混じる。第VI層以下は、ほぼ縄文早期の土器のみとなるが量は極めて少ない。

注目すべきは、第1号住居址の同一個体土器が第V層より、第3号住居址の同一個体土器が第IV層より出土している点である。後者は直線距離で約50mを隔てており、この移動が、最初に述べた遺物の包含状態についてのどの形態によるものかが問題となろう。いずれにせよ、この北東地点の遺物は、約5,000点の膨大な量にのぼり、整理にはかなりの時間を要するため、こ

ここではその概要を述べるにとどめたい。

挿図32 北東地点の土層断面図



- |                    |                     |                          |
|--------------------|---------------------|--------------------------|
| I 耕作土層             | V 褐色粘質土層(炭少量)       | B <sub>1</sub> ローム粒混入褐色土 |
| I' 褐色土層            | V' 褐色粘質土層(僅かに黒色炭少量) | B <sub>2</sub> レキ混入黒色土   |
| II 黒色土層(僅かに褐色)     | VI 赤褐色火山灰層(赤ホヤ層)    | B <sub>3</sub> 黒褐色粘質土    |
| III 褐色土層(炭少量)      | VII ローム粒混入明褐色粘質土層   | B <sub>4</sub> 黒褐色土      |
| IV 黒色土層(僅かに褐色・炭少量) | VIII 黄褐色ローム層        |                          |

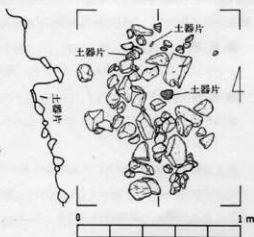
## 1. 遺 構

地形が北側へゆるく傾斜(約18度)するためか、住居址やピットは検出されなかった。ただL18グリッドにおいて、第VI層・赤ホヤ層に食い込む形で集石が見られた(挿図33)。範囲は110×80cmで、約60個のチャート为主体とする自然礫が集まり、楕円押型土器の3片を伴っていた。炭片は検出されず、その性格は不明である。

## 2. 遺 物 <土 器>

本区第I層～第VII層より出土した全ての土器のうち、判定可能な2,717点について分類を行った。接合資料は1点に数えたが、層位の異なる接合資料に関しては一応別個に数えている。個体数については、まだ数値を出すに至っていない。

挿図33 第2号集石遺構実測図



## 第 I 層

縄文中期に属する隆起線文、竹管文、縄文土器が主体となっており、僅かに縄文前期の爪形文土器、列孔浅鉢土器が混じる。

## 第 I' 層

縄文中期の土器が多いが、縄文前期の爪形文、突帯文が増加し、わずかに縄文早期の押型文が混じる。

## 第 II 層

風化の著しい小破片が増加し、縄文早期、縄文前期、縄文中期の遺物が混在している。

## 第III層の土器

最も遺物の多い層であり、接合資料や復元可能な資料がある。縄文前期の爪形文、突帯文、半截竹管沈線文、列孔浅鉢等と、縄文中期の隆起線文、竹管文土器が大多数を占める。須恵器、瓦各1点が含まれ、攪乱の明らかな層である。

## 第 IV 層

遺物量は相対的に少ないが、早期土器の比率が増加し、縄文前期、中期土器がやゝ減少する。

## 第 V 層

各種の縄文前期土器とともに縄文早期の押型文、貝殻沈線文土器等が多くみられ、縄文中期土器は極く少量となる。

## 第 V' 層

縄文中期初頭の土器がわずかに2片混じり（第III層と同一個体）他は縄文前期の各種土器と縄文早期の押型文、貝殻沈線文土器である。

## 第 VI 層

オレンジ色の赤ホヤ層であり、押型文、縄文土器が少量ある。

## 第 VII 層

楕円押型文土器が1点のみ出土

第I層から第III層は確実に人為的な土砂の移動による攪乱である事が判明しているが、調査の結果第IV層～第V層においてもかなりの攪乱、混入がみられ、遺物の状態が安定するのは第VI層（赤ホヤ層）と第VII層のみであった。

## 縄文早期の土器

第VII層において楕円押型文1点が見られ、最下層と考えられる。第VI層より楕円文と表面に斜めの沈線の入る高山寺式楕円文、斜縄文が出土し、これらと同一個体が第V層以上に含まさ

れている。

第Ⅴ層～第Ⅳ層における縄文早期土器は、楕円押型文2種類、菱形押型文、粗大山形文、山形文+拵形文、ネガティブ山形文、竹管文+山形文、突帯付山形文等種々の押型文のバリエーションがある。これらに伴って、少量の貝殻沈線文、条痕文、撚糸文、網目状撚糸圧痕文が見られる。

第Ⅲ層～第Ⅰ層には、第Ⅴ層～第Ⅳ層に接合する押型文（山形文、粗大山形文、菱形文、ネガティブ山形文）貝殻沈線文、条痕文の破片の他、突帯付条痕文、突帯付竹管文+山形文が少量ある。

これらの土器を総合すると、第Ⅴ層には接合する個体が多く見られ、中には器形を伺える径40cmの大形尖底山形押型文土器もある。裏面に斜めの沈線の入る高山寺式の資料は最主体であり、楕円文と菱形文の2種類がある。これは第4号住居址との関連が想定される。突帯をもつ山形文（相木式）は、押型文最終末に位置するものであろう。問題点として、第Ⅴ層以上の縄文早期土器がどのような条件下で前期土器と混在するかが焦点となる。特にネガティブ山形文の検出は当地の類例が少なく、その取扱いには慎重を期したい。

#### 縄文前期の土器

第Ⅴ層から第Ⅰ層にかけて縄文前期の土器が見られるが、特に第Ⅲ層に集中する。縄文前期初頭のものとして粘畑式、木島式が少量ある。北白川下層式で出土量は飛躍的に増加し、Ⅱa～Ⅱc式とあまねく出土を見る。諸磯a式に区分出来るものが少量ある。列孔浅鉢土器は個体数約15で、無文のものが大多数である。赤色顔料の残る土器は54片10個体以上ある。

縄文前期末にかけては、大麦田式が比較的多く見られ、諸磯c式、鍋屋町式、十三坊台式がこれに続く。

本区の前期土器は、該当区の各住居址内出土の土器に比較して、大破片や接合資料が多く、遺物の移動や、廃棄が特に問題とされるところである。

#### 縄文中期の土器

第Ⅲ層に特に集中して見られ、第Ⅴ・Ⅳ層の少量のものは混入とみるべきであろう。第1、2号住居址に共通するものが多い点から、この部分からの遺物の移動が最も考えられる。

縄文中期初頭の形式に属するものが多く見られる。新保・鷹島式を主体とし、更に新崎式、上山田（天神山a）式等の北陸系要素が強く見られる。

縄文中期後半の資料は少量化し、里木Ⅱ式、曾利Ⅰ式～曾利Ⅲ式と、信州系の影響下にある土器形式が見られる。これ以降の資料は見られない。

## 〈石 器〉

土器とともに石器類も多量に出土した。内容は別表の如くである。石鏃が多く、次いで削器類、スリ石、凹石が多い。石鏃は第Ⅶ層に鉞形鏃、第Ⅵ層に三角鏃を見、第Ⅴ層以上は各種のものがある。石匙は左右対称の三角形をなすものは少なく、ツマミが一方に片寄る横形のものが多い。珠状耳飾は2点出土した。黒色のものには孔がある。スリ石は円形のものほとんどであるが、特殊スリ石が第Ⅴ・Ⅵ層に各1点ある。

## 第9節 近 世 墓 (第1, 2 近世墓)

### 1. 第1号近世墓 (挿図34)

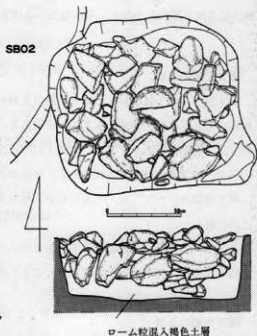
本遺構は第2号住居址東南の周壁を切って作られ、09・10グリッドに検出された。地表には集石が残り、古米より手を加えてはいけな「塚」として言い伝えられていたものであるが、地表の集石位置から北西へずれた地点に検出された。

本遺構は、黄褐色ローム層を30~44cm掘り込み、東西1.23m、南北1.15mのほぼ正方形を呈する。周壁の黄褐色ローム層の掘り込みは、東壁で39~44cm、南壁で38~44cm、西壁で30~37cm、北壁で35~37cmを測る。覆土はローム粒混入褐色土層で、7cm~35cmの礫を多量に含む。

覆土中の遺物は、底面近くより銅銭(景德元寶、皇宋通寶、政和通寶いずれも宋銭3種類)4点、鉄釘2点、不明鉄器2点、木片4点の外、縄文土器片4点、チャート製フレーク1点、下呂石チップ2点が検出された。また覆土中間部の礫の間に素焼の土器片1個体分6点が見られた。

地元の土地所有者の話では、戦後この近世墓が掘り返されたことがあるとも聞かれ、どの程度原形に近いかは不明である。

挿図34 第1号近世墓実測図



## 2. 第2号近世墓 (挿図35)

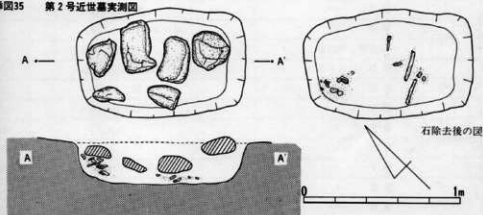
本近世墓は、台地南側のJ6グリッドに検出され、第5号住居址の南約2.2mの地点に位置する。長軸方向はN-47°-Wを示し、長軸110cm 短軸69cmを測る。黄褐色ローム層を約27cm掘り込み、隅丸方形プランを呈する。

厚さ25cmの表土層を除去すると、黒褐色土層中に20~33cm大の河原石が6個配置されていた。そのうち中央の2個の石は、両端の石より7cm低くなっている。6個の石を取り除くと、人骨が確認され、北西側に頭蓋骨、南東側に大腿骨が見られた。ほぼ北を枕に、南西方向に顔を向け、膝を屈曲させて埋葬されたものと思われる。

頭蓋骨、大腿骨の一部は遺存状態は良いが、他の部分は既に腐朽して明確ではなかった。副葬品等は何も検出されず、また木棺の形跡も無かった。

本近世墓は江戸時代の塚(墓)であり、薬師野遺跡に於て発見された「なべかぶり塚」に類似するものであろう。

挿図35 第2号近世墓実測図



埋葬されていた人骨については、須田圭三医師に鑑定を依頼した。鑑定の結果は次のとおりである。

### 江名子向畑遺跡出土の人骨について

人骨の部位明瞭なるもの

- (1) 右上顎骨 (右側第I、第II小旧歯) の一部  
第I、大II大旧歯

右側第I大旧歯頰側歯槽骨部吸収顕著

第I、第II小旧歯は咬合面に中等度の磨耗を認める。

第I大旧歯咬合面  
第II大旧歯遠心歯冠部 } 齧蝕第二度を認める。



- (2)左、下顎骨  $\left\{ \begin{array}{l} \text{第I, 第II小旧歯} \\ \text{第I, 第II大旧歯} \\ \text{智歯} \end{array} \right\}$  の一部

第I大旧歯歯冠部齧蝕第二度を認める。

- (3)左、側頭骨の一部(錐体部、側頭面部)

- (4)長管骨(大腿骨と推定される)両骨端部破損

- (5)其他多数の骨片、数個の歯牙(下顎旧歯1、上顎旧歯1、大歯2、小旧歯3)

指定年齢

旧歯部、咬合面の磨耗状態、齒槽骨の吸収状態、齧蝕の状態

更に歯牙の稍小型なる事から40-50才の小柄な人物の遺骨と

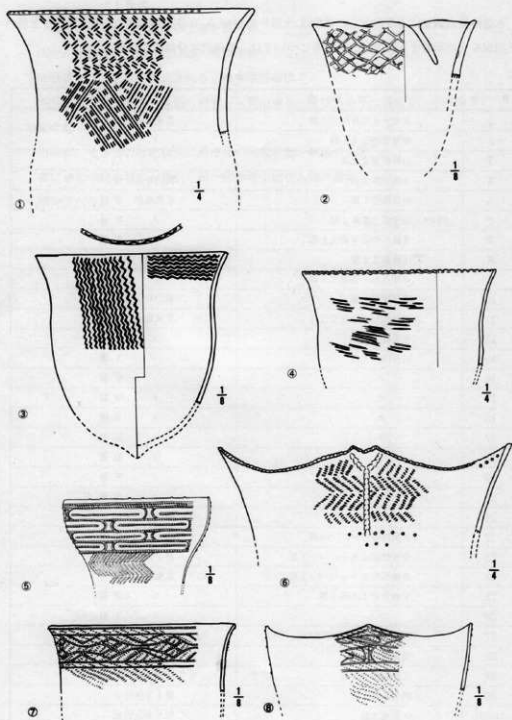
推定される。

(吉朝、藤本、野村)

## 第4章 主要な土器と石器遺構別分類表

本遺跡発掘調査により出土した遺物は、土器片約6500点、石器等2800点である。主要な土器の実測図を次に記載する。なお、石器等については、遺構別に分類表を作製した。

番号	文様形態	出土地点
1	ネガティブ押型文土器	北東地点 V層
2	菱形文押型文土器	" "
3	山形押型文土器	" "
4	条痕深鉢土器	第13号住居址
5	刻目隆帯土器	北東地点 III層
6	羽状縄文深鉢土器	" IV層
7	連続爪形浮隆線文土器	" III層
8	浮隆線文土器	" III層
9	連続爪形浮隆線文土器	" III層
10	縄文深鉢土器	第13号住居址
11	連続爪形浮隆線文浅鉢	北東地点 III層
12	有孔無文土器	" III層
13	列孔浅鉢土器	" V層
14	"	" V層
15	"	" III層
16	"	" V層
17	"	" III層
18	"	" III層
19	"	" V層
20	"	" III層
21	半截竹管文土器	第12号住居址
22	波状口縁深鉢(?)土器	" IV層
23	半截竹管文キャリバー土器	第2号住居址外片内
24	連続爪形文キャリバー土器	北東地点 V層
25	半截竹管文浅鉢土器	" IV層
26	"	" I層
27	隆起線文土器(蓮華文)	" I層
28	縄文深鉢土器	第1号住居址
29	区画隆帯文土器	北東地点 I層
30	縄文深鉢土器	第1号住居址
31-33	弥生式土器	第9号住居址



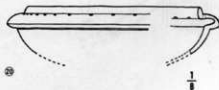
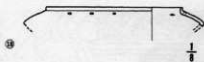
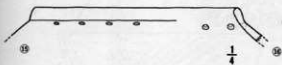
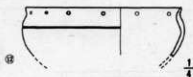
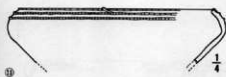
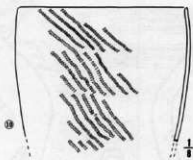
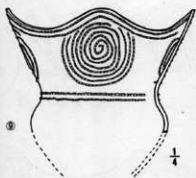


插图38 土器实测图3)

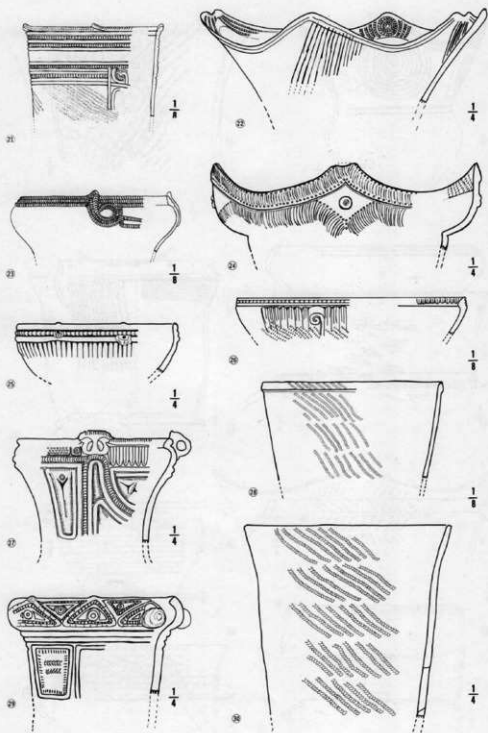
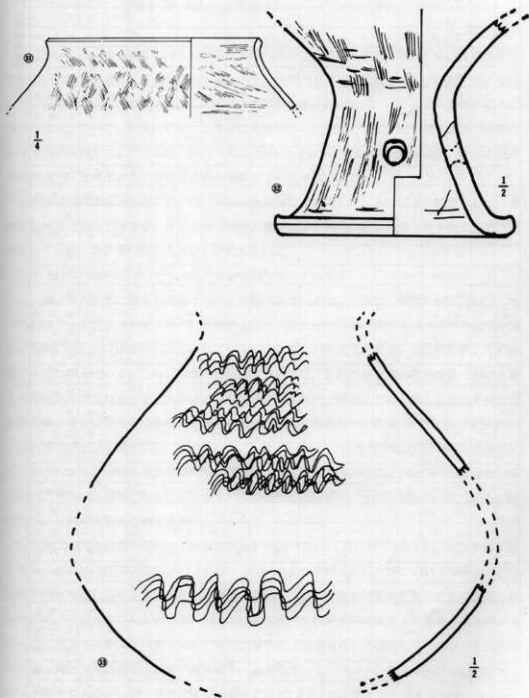


插图39 弥生式土器实测图





## 第5章 総括

本遺跡は、高山市の南東の地域に当る江名子町大字上江名字字向畑に所在する。この地帯は位山脈の北側に派生した丘陵性の山麓であり、小谷が発達し台地状をなしている。その中の一つに向畑遺跡が立地している。この遺跡の西側に江名子川が流れ、また台地の西側の崖下に清水が湧出している。本遺跡をめぐる環境は水利に富んだ地域である。近年農業改善工事等により大きく変貌をなしているが、先述されたように、ひじ山遺跡を始め糠塚遺跡、ツルネ遺跡、栗師野遺跡、泉水遺跡など著名な遺跡が集中している地域である。

今回圃場整備事業の実施に当って、事前に発掘調査を実施した。その調査の結果として、遺構は住居址13基、土壇5基、ピット群3箇所、集石遺構1箇所、近世墓壇2基を検出した。遺物として石器、土器類他に人骨などが検出された。

以下これ等の資料について二、三の考察を行なうことにする。

1. 縄文時代早期に属する遺構として、SB04が知られる。これは、東西2.6m、南北2.7mの円形状をなす竪穴住居址であり、周壁の上部に口径5cm~15cm、深さ4cm~10cmの柱穴が壁面の傾斜に対してほぼ直角に掘込まれている。この竪穴の中央部が平であり、住居としての機能を十分に備えている。これに類似する住居址としては、長野県茅野市の棚畑遺跡における第2号住居址が知られる。<sup>(註1)</sup>また住居址の周壁に見られる柱穴が傾斜している例として、茅野市の駒形遺跡の場合は周溝内の小穴列が知られる。これは35個の小穴が内傾(約58°)している。

これ等の例などを参考にして推考されることは、SB04の住居の小屋伏は円錐状をなすものと考えられる。住居址覆土の第Ⅲ層の遺物が、縄文早期の高山寺式に比定される押型土器を始め、早期の土器類であることにより、この住居址の時期は、伴出土器にやや先行するか同時期の、早期の住居址と推定される。

2. 縄文時代の前期の住居址と推定されるものは、SB05、SB07、SB11、SB13の4基である。住居址の残存状態はSB13を除いては、あまり良好でない。特にSB11は悪い。また遺物の出土状態も良好とは言えない。時期の決定については種々の検討を重ねた上で推定したものだが、主なもののみ記述する。SB05は覆土中の土器が早期に属する少量の土器を除いては、全て前期の中葉より後葉の時期であり、早期の土器は明らかに混在したと考えられる状態である。従って本住居址は前期に属するものと推定される。SB07の覆土中の遺物は磨耗度の強い土器片であるが、全て前期に属するものである。SB11は時期を決定するのに積極的な資料に欠いているが、SB10、SB12などによって切られているのと、それらの住居址の時期と



の関連の上で前期の住居址の範疇<sup>はんごう</sup>に入るものと推定される。SB03は覆土中および床面上の遺物よりして前期に属する住居址と推定される。

以上の住居址の時期を細分することは不可能であった。これ等の住居址の共通点として、いずれも地床炉である事が挙げられる。

3. 縄文時代中期の住居址と推定されるものは、SB01、SB03、SB06、SB08、SB10、SB12の6基である。これ等の住居址の中でSB03を除いては、円形プランか石組炉を有する点で何らかの関連性を持っている。次に住居址に伴出し時期決定の資料となる土器は、中期前半のものが大部分で、僅かにSB08に後半期にまたがる土器が知られる。SB03の住居址のプランは明確でないが、焼土が見られまたピットが知られる。覆土中の土器は早・前・中期に渡り2箇所のピットにおいても同様であった点から、その下限は縄文中期の時期と考えるべきであろう。

4. 弥生式時代に属する住居址としてSB09が検出された。今回の調査によって知られた唯一の弥生式時代の資料である。同住居址内より出土した器台、橋描波状文、条痕文の変形土器などは欠山期のものである。住居址のプランは隅丸方形プランで、主柱と考えられる四本の柱穴、また地床炉に4個の支石が見られる点は、同江名子地区区内で検出された薬師野遺跡の同時期の住居址と同じ状態であり、<sup>(註2)</sup>一つのパターンを示すものである。

5. 住居址以外の遺構としては、土壌が5基検出された。時期は縄文時代（早期、前期、中期）と近代のもので、SK5の時代は縄文時代と考えられるが、時期は不明である。

ピット群は三箇所に集中して検出された。この他に80cm～100cm大の円形ピットが連なったものが知られる。これ等のピット群より縄文期の遺物が出土しているが、性格を識別することは出来ない。

集石遺構1基と近世墓が2基検出され、近世墓（江戸時代）より人骨が出土している。

以上の様に縄文時代、弥生時代、近世の遺構が知られたのである。

6. 北東地点と称して取扱った、SB09～SB12の東方の部分に当るK・L19グリッドを中心とした谷状の地形をなす部分において、多量の資料が検出された。この地点はこの地形よりして、ゴミ捨て場のな場所である。上部においては人為的に二次的堆積の部分も知られ、その層においては層位的把握は無意味であるが、各遺構出土の資料と関連する資料も見られる。下層の一次堆積層中において、飛騨地方で初めての赤ホヤ火山灰層の確認は、その下部層のを始め上部との層位的な相対年代を推定する上で好資料と言える。

また多量の土器の中で特に注目すべきものについて挙げてみよう。北東地点において層位的に明確に検出され、SB04と関連づけられる高山寺タイプの押型文土器、それに次ぐ菱形回転<sup>(註3)</sup>押型文土器が見られる。裏面に斜位の太い沈線が引かれており、破入遺跡などに類似遺物が見

られる。網目状文、条痕文を始め、貝殻沈線文などの田戸系の土器が客体土器として知られる。また、押型文終末段階の凸帯は山形文が知られる。その他、半回転施文の、ネガティブ山形文（縦進入り）の存在は注目すべき今後の課題である。

この他に前期初葉の土器を始め、中期の前葉に於ける東日本（信州系土器形式）・西日本・北陸系の土器の交流の問題、その他石器の問題については、出土遺物の詳細な整理作業を継続中であり、近い将来にその成果を発表する様に努めている。

本調査でSB09中より出土した弥生時代の有孔磨製石鏃は、当地方での発掘例では嚙矢である。また表土層より出土した碧玉製管玉1点は、古墳時代のものであり、隣接地に古墳時代の遺物の出土、並びに古墳の存在が知られている点より付近の古墳の研究を待たねばならない。<sup>(注4)</sup>

上述して来た様に、各時期の遺構及び遺物の上より、本遺跡の立地している向畑の台地は、縄文時代の早期～中期にかけ、更に弥生時代の一時期に住居を含む土地利用がなされ、その後近世に至って再び墓地として、更に農業の生産地として利用が続けられ、今日また近代農業の場として大きく変遷しようとしている。今回の向畑遺跡発掘調査は、先史時代の究明に多くの資料を提起したのである。

(大江)

(注1) 八幡一郎「日本史部山地に於ける縄文早期文化の研究」(上) 昭和47年5月

(注2) 「薬師野遺跡発掘調査報告書」 高山市教育委員会 1981

(注3) 「破入遺跡」 高山市教育委員会 1977

(注4) 本遺跡の西へ谷を隔てた台地上において、かつて金環が出土している。



1. 向畑遺跡全景



2. 遺跡全景・発掘作業中



3. 遺跡南東部・表土除去完了



4. 遺跡南東部・表土除去完了



5. 遺跡中央部・表土除去完了



6. 遺跡全景・造成作業



1. 発掘作業状況



2. 発掘作業状況



3. 第1号住居址



4. 第1号住居址



5. 第1号住居址の石組炉



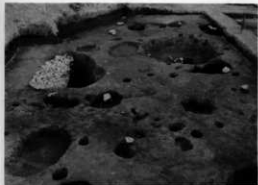
6. 第1号住居址出土の土器



1. 第2号住居址



2. 第2号住居址・第1号近世墓



3. 第3号住居址・第4号住居址・第2ピット群



4. 第4号住居址・第3号住居址・第2ピット群



5. 第2ピット群出土の炭化したクルミ



6. 第4号住居址



1. 第5号住居址



2. 第5号住居址内集石遺構



3. 第5号住居址



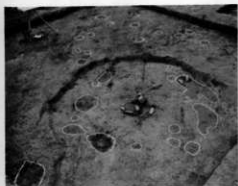
4. 第6号住居址



5. 第6号住居址の石組壁



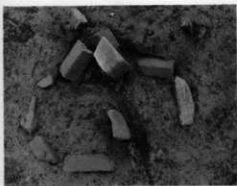
6. 第7号住居址



1. 第8号住居址



2. 第8号住居址



3. 第8号住居址の石組炉の発掘状態



4. 第8号住居址の石組炉(復元)



5. 第8号住居址出土の土器



6. 第8号住居址内P<sub>1</sub>出土の土器



1. 第9～12号住居址全景



2. 第9号住居址



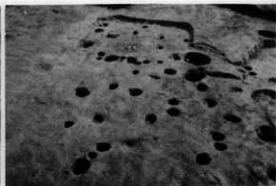
3. 第9号住居址内P<sub>1</sub>出土の弥生式土器



4. 第10号住居址



5. 第10号住居址の石組炉

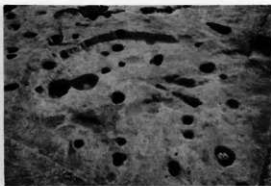


6. 第11号住居址(手前)

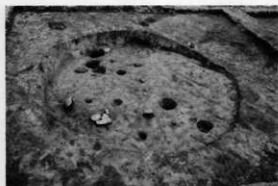




1. 第12号住居址出土の土器片



2. 第12号住居址



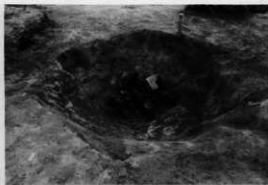
3. 第13号住居址



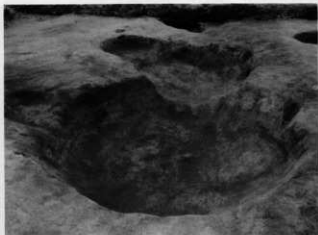
4. 第13号住居址出土の土器



5. 第1号土坑



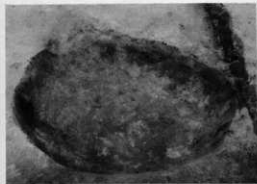
6. 第2号土坑



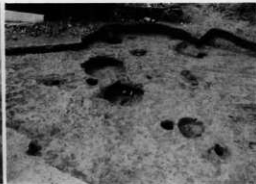
1. 第3号土壇



2. 第4号土壇



3. 第5号土壇



4. 第1ピット群



5. 第2ピット群のP<sub>14</sub>・P<sub>15</sub>



6. 第3ピット群



1. 大P<sub>1</sub>



2. 大P<sub>1</sub>の土器出土状態



3. 北東地点



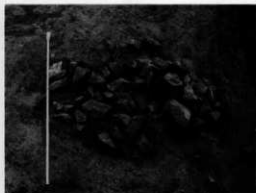
4. 北東地点



5. 北東地点の作業状況



6. 北東地点の土器出土状態



1. 北東地点・赤ホヤ層直上の第2号集石遺構



2. 北東地点出土の縄文時代早期の土器



3. 北東地点の土器出土状況



4. 第1号近世墓の礎



5. 第1号近世墓内陶器



6. 第1号近世墓内出土の銅銭(景徳元寶)



1. 第2号近世墓



2. 第2号近世墓内の人骨



3. 第2号近世墓内の人骨

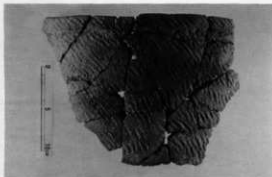


4. 市民見学会

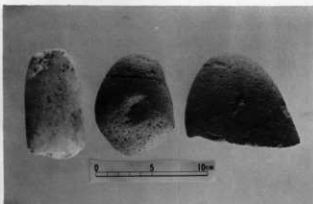
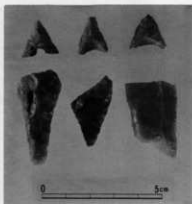


5. 市民見学会

1. 第1号住居址出土の土器



2. 第1号住居址出土の土器

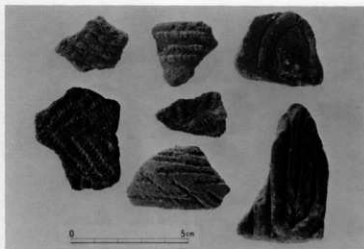


3. 第1号住居址出土の石器

4. 第1号住居址出土の石器(磨製石斧・凹石・磨石)



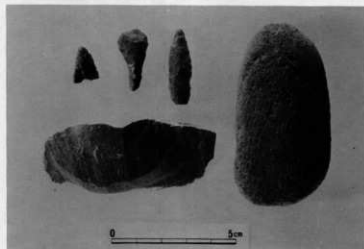
5. 第1号住居址出土の土器



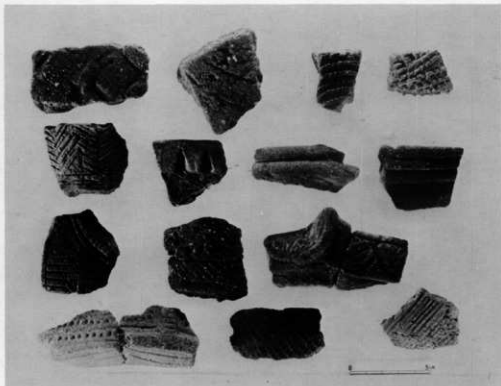
1. 第2号住居址出土の土器



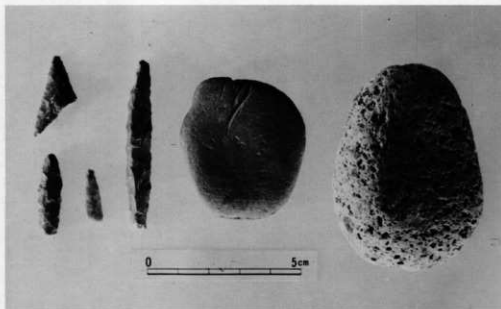
2. 第2号住居址外  
P<sub>10</sub>(左2点)・P<sub>11</sub>出土の土器



3. 第2号住居址出土の石器

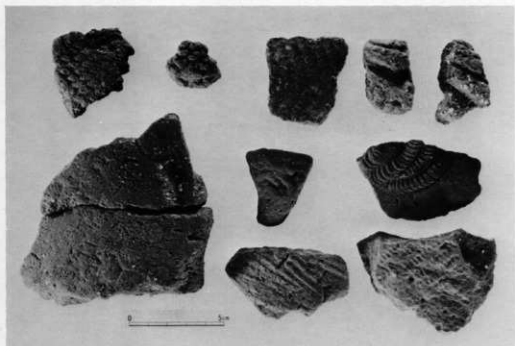


1. 第3号住居址出土の土器



2. 第3号住居址出土の石器

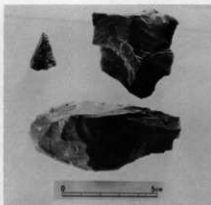




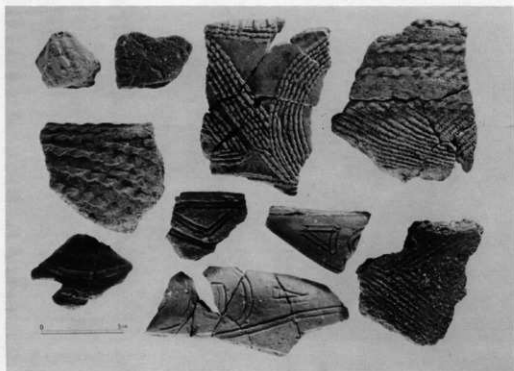
1. 第4号住居址出土の土器



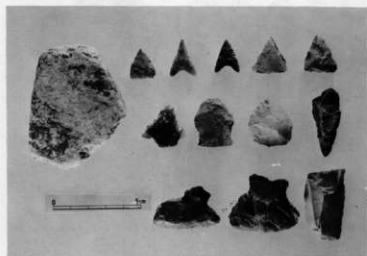
2. 第4号住居址出土の早期土器



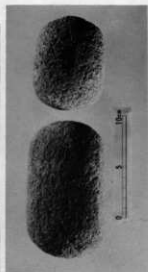
3. 第4号住居址出土の石器



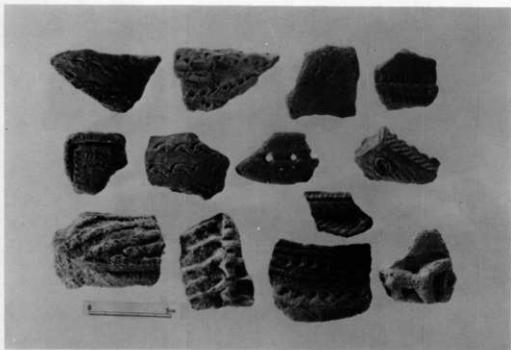
1. 第5号住居址出土の土器



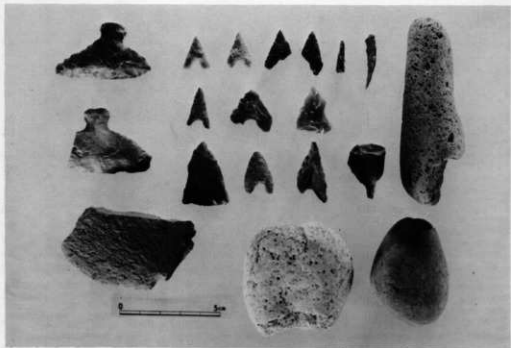
2. 第5号住居址出土の石器



3. 第5号住居址出土の磨石・凹石



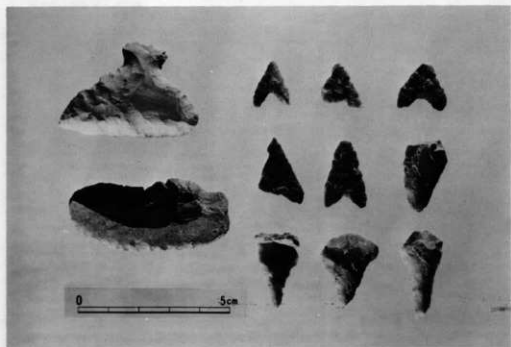
1. 第6号住居址出土の土器



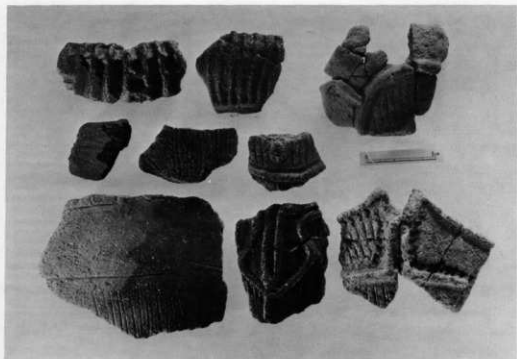
2. 第6号住居址出土の石器



1. 第7号住居址出土の土器



2. 第7号住居址出土の石器



1. 第8号住居址出土の土器



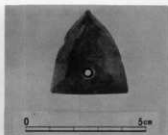
2. 第8号住居址出土の石器



3. 第8号住居址出土の磨製石器



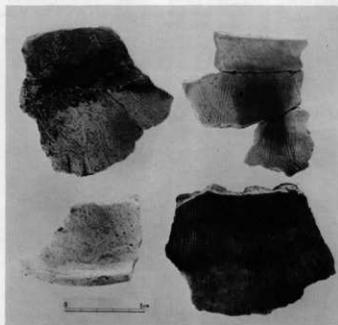
1. 第9号住居址出土の土器



2. 第9号住居址出土の磨製石鏃



3. 第9号住居址出土の礫石



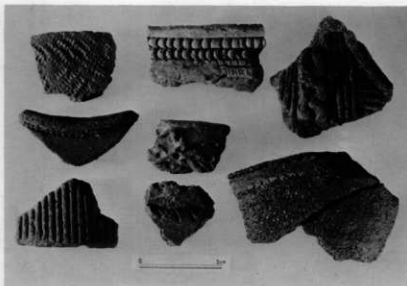
4. 第9号住居址ピット内出土の土器



5. 第9号住居址出土の弥生式土器  
(器台)



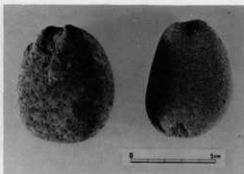
6. 第9号住居址ピット内出土の石器



1. 第10号住居址出土の土器



2. 第10号住居址出土の石器



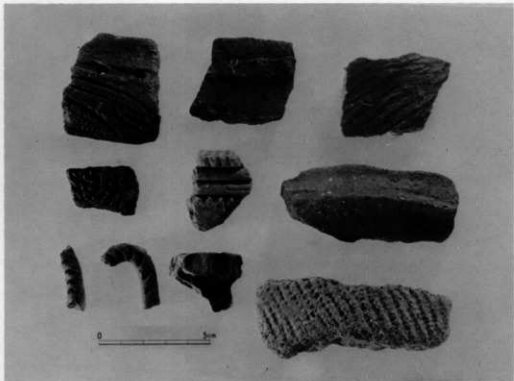
3. 第10号住居址出土の石鎌



4. 第10号住居址出土の石器(磨製・打製石斧)



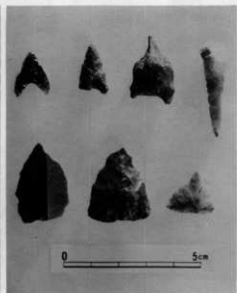
5. 第11号住居址出土の遺物



1. 第12号住居址出土の土器

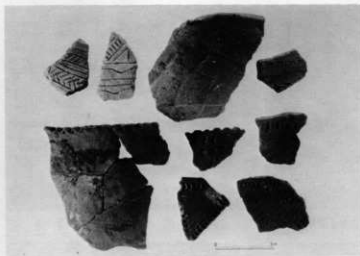


2. 第12号住居址出土の土器

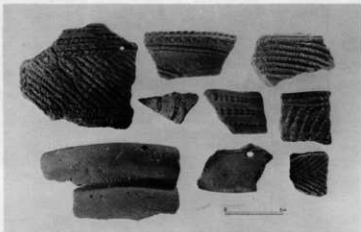


3. 第12号住居址出土の石器





1. 第13号住居址出土の土器



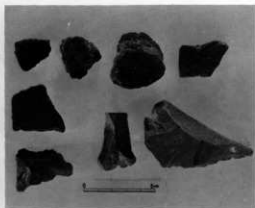
2. 第13号住居址出土の土器



3. 第13号住居址出土の石器



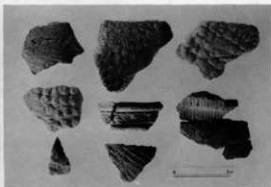
1. 第1号土壌出土の遺物



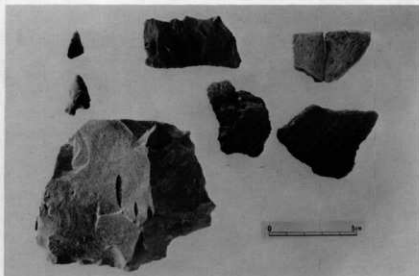
2. 第2号土壌出土の遺物



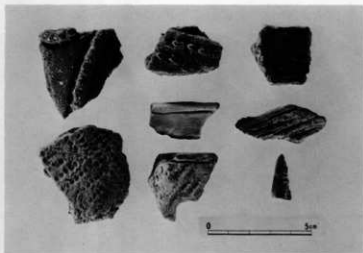
3. 第3号土壌出土の遺物



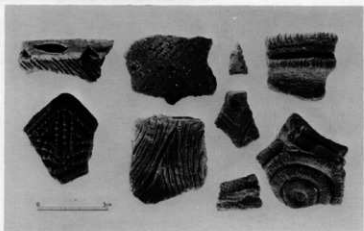
4. 第4号土壌出土の遺物



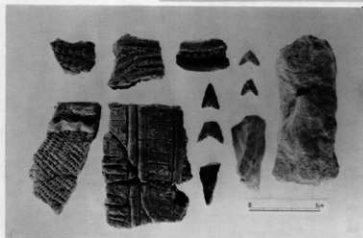
5. 第5号土壌出土の遺物



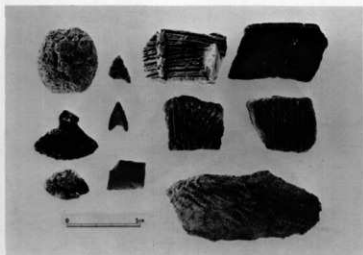
1. 第1ピット群出土の遺物



2. 第2ピット群出土の遺物



3. 第3ピット群出土の遺物



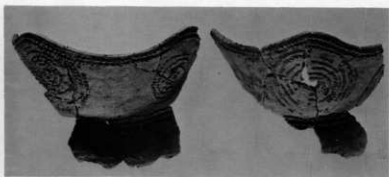
1. 大ピット内出土の遺物



2. 北東地点・第V層の早期土器



3. 北東地点・第III層の前期土器



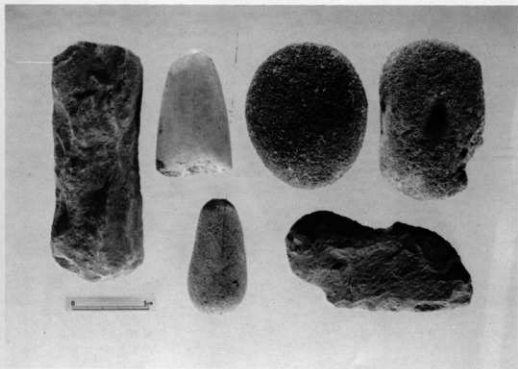
1. 北東地点・第Ⅲ層の前期土器



2. 北東地点・中期土器



3. 北東地点・第Ⅲ層の石器類



1. 北東地点・第Ⅲ層の石器



2. 向畑遺跡出土遺物

向畑遺跡発掘調査報告書

昭和58年3月発行

編集 高山市教育委員会  
発行 高山市教育委員会  
印刷 大進社  
高山市有楽町40番地